

彷徨

20

目 次

| | | | |
|-----|---------------------|----------------|----|
| I | 山 行 総 覧 | | 1 |
| II | 山 行 報 告 | | |
| | 1968年男子 | | 3 |
| | 1968年女子 | | 17 |
| | 1969年男子 | | 25 |
| | 1969年女子 | | 34 |
| III | クラブ存続問題の総括 | | |
| (1) | 資 料 | | 39 |
| (2) | 公式山行について | | 41 |
| (3) | 論説 現代高校登山論 | 在間直樹 | 43 |
| IV | 寄 稿 集 | | |
| | 山での死を感傷的回想に終わらせない為に | 在間直樹 | 48 |
| | ワンゲルに時をすごして | 田口真啓 | 49 |
| | スポーツ登山を行なうクラブ員として | 荒木仁夫 | 50 |
| | 2年になつて | 東郷頼子 | 51 |
| | このクラブに入つて | 田辺宏子 | 51 |
| | 山 で | 荒木達郎 | 52 |
| | ワンゲルの中の俺 | 倉重篤郎 | 53 |
| | ワンゲル部員に期待する | 12期 小川建吾 | 55 |
| | どうしよう | 20期 岩井祥子 | 57 |
| | 高校生のリーダーについて | 4期 田中将利 | 57 |
| V | 部員名簿・西朋登高会会員名簿 | | 60 |
| | 編 集 後 記 | | 64 |

I. 山行総覧

◎ 1968年度 男子

| 山行名 | 目的地・コース | 期 間 | 参 加 者 |
|-------|------------------------------|--------------|-----------------|
| 新入歓迎会 | 川 苔 山 | 4 / 13 ~ 14 | ③-12, ②-9, ①-10 |
| 個人山行 | 西丹沢主稜縦走 | 4 / 27 ~ 28 | 木俣, 在間, 宮崎 |
| 雪上訓練 | 谷川岳幽ノ沢 | 5 / 2 ~ 3 | ③-1, ②-4 |
| 5月山行 | 三頭山 - 生藤山 | 5 / 11 ~ 12 | ③-3, ②-6, ①-12 |
| 6月偵察 | 大菩薩小金沢連嶺 | 6 / 8 ~ 9 | ③-3, ②-3 |
| 6月山行 | 同 | 6 / 22 ~ 23 | ③-3, ②-6, ①-10 |
| 夏山合宿 | 室堂 - 雷鳥沢 - 五色間山 一薬師岳 - 折立 | 7 / 21 ~ 27 | ③-2, ②-4, ①-9 |
| 個人山行 | 八ヶ岳縦走 | 8 / 5 ~ 8 | ③-2, ②-2, ①-4 |
| 個人山行 | 奥秩父縦走 | 8 / 22 ~ 25 | ③-2, ②-4, ①-3 |
| 9月山行 | 北岳(大樺沢吊尾根) | 9 / 21 ~ 23 | ③-1, ②-4, ①-5 |
| 個人山行 | 甲武信岳鶏冠尾根 | 9 / 22 ~ 23 | 伊東, 中村, 水口 |
| 10月山行 | 丹沢主稜縦走 | 10 / 19 ~ 21 | ②-4, ①-5 |
| 11月山行 | 雲 取 山 | 11 / 16 ~ 17 | ②-3, ①-5 |
| 春山偵察 | 仙丈岳地蔵尾根往復 | 11 / 22 ~ 24 | 木俣, 在間, 田口 |
| スキー合宿 | 樽池高原御殿場小屋 | 12 / 25 ~ 31 | ②-5, ①-8 |
| 1月山行 | 乾徳山・黒金山 | 1 / 25 ~ 26 | ②-3, ①-5 |
| 春山合宿 | 八ヶ岳夏沢峠定着 硫黄・天狗往復 | 3 / 25 ~ 31 | ③-2, ②-3, ①-4 |

◎ 1968年度 女子

| 山行名 | 目的地・コース | 期 間 | 参 加 者 |
|-------|------------------------|----------|---------------|
| 5月山行 | 鷹ノ巣山 | 5/12日帰り | ③-2, ②-3, ①-5 |
| 6月山行 | 大岳山 | 雨のため中止 | |
| 夏山合宿 | 折立-薬師岳-黒部 五郎-双六-新穂高 | 8/5~11 | ③-3, ②-2, ①-3 |
| 9月山行 | 雲取山・飛竜 | 9/21~23 | ②-1, ①-3 |
| 10月山行 | 三頭山 | 10/20日帰り | ②-1, ①-4 |
| 11月山行 | 大菩薩峠 | 11/16~17 | ①-2 |
| 2月山行 | 御前山 | 悪天候のため中止 | |
| スキー合宿 | 八方尾根黒菱小屋 | 3/13~18 | ③-3, ②-2, ①-3 |

◎ 1969年度 男子

| | | | |
|-------|-------------------------|----------------|----------------|
| 個人山行 | ソバツ山・西谷山 | 4/12~13 | ②-5 |
| 新人歓迎会 | 川苔山 | 5/2~3 | ③-5, ②-8, ①-18 |
| 雪上訓練 | 谷川岳幽ノ沢 | 5/4~5 | ③-1, ②-4 |
| 公式山行 | 御前山 | 6/11日帰り | ③-2, ②-7, ①-10 |
| 5月山行 | 雲取山 | 6/7~8 | ③-2, ②-5, ①-7 |
| 6月山行 | 丹沢主脈 - 主稜 | 6/28~29 | ③-2, ②-5, ①-5 |
| 夏山合宿 | 折立-薬師-双六-槍 -横尾-徳本-島々 | 7/30 ~ 8. 8 | ③-3, ②-4, ①-2 |
| 公式山行 | 金峯山・ミズガキ山 | 8/24~26 | ②- ①- |

◎ 1969年度 女子

| | | | |
|------|-----------|---------|---------------|
| 6月山行 | 丹沢鍋割山 | 6/21~22 | ③-1, ②-3, ①-2 |
| 夏山合宿 | 風吹大池-白馬往復 | 8/7~14 | ②-3, ①-2 |

注) ○1969年度で、山行名の項は個人山行でもクラブの山行の場合は前年と同じ名称をつけ、純個人の場合だけ個人山行とした。

○参加者の項は人数のみ学年別に記した。③-2は3年生2人を示す。O.B, 先生は省略。(本文参照)

○男女合同山行は、男子の山行として示した。

Ⅱ．山行報告

1968年男子

(1) 新入生歓迎会 - 川苔山

- ◎ 参加者 男子 3年 8名, 2年 6名, 1年 5名
女子 3年 4名, 2年 3名, 1年 5名 (O.B, O.G) 多数
卜林先生 (with his son)

- ◎ 4月13日～14日(晴)

以前から歓迎会を別の場所でやろうと言う声もあつたのだが、小屋などの関係もあつて、結局、今年も川苔山ですることにした。我々先発隊3人は50人分の食料、器具を持って出発する。荷が非常に重く、足どりも重く小屋まで歩く。

朝から薪を集めて飯のしたくをする。煙の中で苦悶し、涙と汗とつばきでぬれた男たちが大活躍する。本隊が到着する頃どうにかうまそうなカレーが出来上がつていた。時期の早かつたせいでもあるが、1年生が少ないようだ。それでもこの時ばかりは新入生として大事にされ、彼らもその2年のいたわりに驚いている様である。2年生も初めての後輩ということで明らかに2年の面子を意識した行動をとつている。食事も終り、歌を唱つて楽しくすごす。2年生は食器洗い。後始末をつけて小屋を出発。川苔山で、これから登るであろう幾多の山を1年に説明する。あとはいつもの道を1年生をいたわりながら鳩ノ巣へ向う。

(永井記)

(2) 雪上訓練 - 谷川岳幽ノ沢

- ◎ 参加者 古西, 木俣, 在間, 永井, 小口 (O.B) 多数

土合に着くと、新清水トンネル内から地上まで谷川の一番目の関門である480余段の階段がある。朝食は土合の駅でとり、O.Bの待つ幽ノ沢まで急いだ。練習の初めはキックステップ、次にトラバース、最後は滑落停止である。キックステップ、トラバースで我々は足元を見てばかりいたが、ブロックを投げられたりしながらどうやら上方を注意するようになつた。滑落停止の卒業試験は斜面の急な雪質のかたい所で行つたが、ほとんど決められなかつた。これは、腹筋、腕力不足も大いに関係することなので地上のトレーニングを改良するの必要性を感じた。この様な訓練は常に真剣になつていなければいけないが、我々はどなられ、始終緊張していたのでこの点は良かったと思う。結果的にみると、一日

でこれら全部を行つたのであるから雪上技術をつけたというより、感覚を少しばかりつかんだだけで終つた様であつた。(永井記)

③ 5 月 山 行 - 三 頭 山

◎ 参加者：(C.L)古西,(S.L)木俣;山本,伊東;在間,田口,永井,小口,宮崎;荒木,小石,小林,佐藤,鈴木,田原,西井,峯,宮坂,本村,吉田晶夫,吉田真也;尾形先生。

◎ コースタイム

5月11日 一五日市一數馬 18:17

5月12日(曇) 出発 6:25一三頭山 8:40 一丸山 10:50~11:40

一上岩 1:6:10

5月山行,1年にとつては初めてのわがクラブ本来の姿の山行。1年の幕営技術の奥地練習と15kg程の荷を背負い歩きぬくことを目的として行なわれた。數馬では,薪で炊いたうまい飯と食糧係自慢のおでんで楽しい食事のあと,1年は,明日への期待をいただきつ,2年は,多少の不安を秘めて就寝。

翌朝,天気よし。張り切つて出発。途中少し道に迷つたが2Pで三頭山頂。奥多摩湖方面の展望はすばらしかつた。その名の通り笹の多い笹尾根を順調に下つていく。明るく見晴しのよい尾根,また木の間から日光がきらきらとほれる尾根の道,そこを歩いていく我我,山とはいいものだ。しかし,11時頃になつて雲か空一面をおおい,昼食中にばらばらと少し落ちてきたが,ほどなくやんでほつとする。浅間峠を過ぎて少し行つた所,道が2つに分かれていた。我々は右の踏跡のはつきりしている道をとつたが,これはたいへんを誤りで,下の村へ下りる道だつたのだ。大分いつてから3年生の指摘で気づき,急いで引き返した。こういう時の一年生への精神的影響は非常に大きなものがある。ここで1年生の1人がまいてしまつてパーティといつしよに行動する事ができなくなつたので,3年生,木俣がついてパーティから離すことになつた。そして早く三国峠に着いたパーティは荷をおいて,生藤山に向かつたが,道がわからず登らずじまいとなつた。バテた一年がようやく分岐につき,しばらく休ませてから再びいつしよに歩きだすが,少したつてまた離れてしまつたので,3年生についてもらつて先に下る。他の1年もこの時まで相当消耗しているようなので,フアイトをかけ気を引きしめて下つた。駅まで歩く予定であつたが,2年の間で協議の結果,予定時間は十分歩いたことであるし,1年の疲労度を考えて,

バスに乗って帰った。

(田口記)

(4) 6 月 山 行 - 小 金 沢 連 嶺

◎ 参加者 (O.L)古西, (S.L)木俣;長谷川,中村;在間,小口,田口,永井
宮崎;荒木;数沢;小石;小林;佐藤;鈴木;西井;本村;吉田晶夫;
吉田真也;草野先生 (O.B)滝口氏

◎ コースタイム

6月22日 一氷川一小菅17:00~17:35 - フルコンパ21:00

6月23日 出発6:30-小金沢山9:15-湯ノ沢峠13:10-初鹿野
16:05

夏山のトレーニングとして暑い日さしの中を20kgの荷を背負って歩くにはどのコースが適切かと考えて、2年前にやつて相当苦しかったという話のある小金沢連嶺を選んだ。18号「彷徨」に倒木が多いことも報告されていたので、2年としてコース全体を把握する為に事前に偵察をしていた。

小菅に着くと雨がパラパラ落ちている状態なので、先に夕食を済ませて歩き出す途中で雷雨となる。初めての夜歩きでしかも雷雨、1年生にとってはかなりの負担であつたのだろう。体力的には頑張れるはずなのに、1年生の1人が遅れた。しばしば鳴っていた雷の音も遠ざかり、雨もやみ、あたりは静寂そのもの。ただ響くのは上級生の励ましの声。

翌朝、天候曇。晴れるのを願いつつ(上級生のみ)大菩薩峠へ出る。人がたくさんいて、ゴミが散らばり、はなはだ感じ悪し。だが、熊沢山から石丸峠に出るともう我々しかない。この辺は広々とした草原で、たいへん気持ちの良い所だ。さらに歩いて行けば、またも美しい草原が我々の目を楽しませてくれる。狼平である。小金沢山を過ぎたあたりから前日バテた1年生が遅れ、3年生に後ろについてもらう。予定より大分遅れて牛奥雁が腹摺山に着き昼食とする。ここは晴れていると展望の良い所なのだが、川クルミの頭を越えて黒岳までは倒木が多いので隊を2つに分けて間隔をあけて歩かせる。黒岳から湯ノ沢峠までは大菩薩には珍しい砂礫の急斜面であつた。湯ノ沢峠下の水場で小休止後、沢沿いの道を下つて行くと木場道になり、程なく村道に出、しばらくするとトンネルに着き休憩。駅まで1P、夕立にあいながらもフライトをかけ駅まで頑張った。夏山を目指しての訓練としては、一応成功であつたと言える。

(田口記)

5) 夏山合宿(立山 - 槍縦走)

◎ 参加者 (C.L)古西, (S.L)木俣, 水口, 在間, 田口, 小口; 荒木, 教沢,
小石, 佐藤, 鈴木, 田原, 西井, 本村, 吉田; 中村先生(一ノ越まで);
(O.B)平木氏, 山野氏。

◎ コースタイム

7月22日(晴) 一富山5:00-室堂7:40-雷鳥沢9:15(幕営)-奥大
日岳往復

7月23日(ガス) 出発6:00-一ノ越8:20-五色ガ原12:45

7月24日(晴)- 停滞

7月25日(晴) 出発4:40-越中沢岳7:15-スゴ小屋11:20-間山
12:20

7月26日(快晴) 出発4:45-薬師岳7:35~8:25-薬師峠9:30~
10:30-折立13:30

小見から富山に向かう電車の内は、立山へ速足に行つたという小学生で溢れていた。ただでさえ暑い昼下がりの電車の内は、時折発する女生徒の声で一層暑く感じられた。あとは、電車の揺れる音と時々速くで鳴いている蟬の声が耳に入つては来たが、それはもうたうつろだ空虚にしか響かなかつた。

私達は7月22日の朝雷鳥沢に着いた。途中のバスやケーブルの連絡は全く面倒なものだつた。今回の合宿は最後まで混乱したので、雪のまだ残る室堂に着いた時には、ほつとした思いだつた。雷鳥沢は残雪が多くテントの近くまで雪が迫っていた。近くにはまだ片付かないままの雷鳥荘の残骸が、あちらこちらに散乱していた。雪の白い統一と黒々とした残骸の不調和がいかにも印象的だつた。私達は陽が昇り切らないうちに、奥大日に向かつた。余り目立つた山ではなかつたが、眼前の剣は圧巻だつた。古西さんは百年の知己にでも再会したように「やつぱり剣はいいねえ」などと嘯^{うそ}っていたが、私は当初登る予定だつたので、なおさらのこと惜しかつた。富士には月見草がよく似合うとは、ある小説家の言であるが、剣にはピツケルーとのことで写真を一枚撮つておいた。

これは合宿が終つて一週間以上も過ぎた八月に入つてからの事であるが、8月8日付の新聞に「立山の集団赤痢ひろがる」という見出しで、雷鳥沢にも赤痢が発生したことを伝えていた。(後に大腸菌であると判明)。

翌朝私達は陽の昇る前に縦走の第一歩を踏み出した。前日古西さんと在間がルートを見ておいたはずであつたが、どうも道を間違えたらしい。私達のいる位置より遙か下の方を団体の列がどんどん追い抜いていつた。結局仕方なしに雪面をトラバースして、一ノ越の少し手前の彼等が通つて行つた道に出た。大分時間をロスしてしまつた。テント場を出た時分は晴れていたのが、一ノ越に着いた頃にはガスが出て風が強くなつていた。時間と天候の悪化により予定していた立山登頂を断念して、浄土山に向かう。途中早大山岳部の平野さんとすれちがう。日に焼けて真黒だつたが、人恋しそうな顔をしていた。浄土山を越えるあたりから水口さんが遅れはじめた。昼食の時も一緒になれなかつたが、私達が五色の幕営地に着いてしばらくしてから、平木さんと共に追いついた。この日は行程は楽であつたが、何となく体がだるかつた。

夜私は気分が悪くて寝つかれなかつた。とうとう午前一時頃、テントを開いて吐いてしまつた。その後朝まで全く眠れなかつた。この症状は私だけではなかつた。小石・佐藤・田原・西井それに平木さんまでが同じような状態にあつた。特定のテントではなく、各テントの者が同じような症状を訴えているので食料関係に手違いがあつたのではないかと考えて、以後生水を飲まないようにさせ、食料を点検した。結局この日は動けそうもないので、古西さんと平木さんとも相談して停滞と決定する。暗い一日だつた。これも後日の事であるが、反省会で数々の問題が指摘された。その中で、食糧係から、鶏肉の腐敗が問題にされた。肉の中で鶏肉が最も腐り易く、その加工についても完全ではなかつたということである。私も一時は何か口実が欲しくてそう信じていたが、例の赤痢事件以来、今では水に原因があつたのではないかと思つている。私達はその後肉の加工について研究したが、味噌漬や煮ぐめにしておけば夏でも1～2週間は確実に保つ事が出来るのを証明した。

翌日になつて全員ある程度回復したので、前進を決定する。食事を余り取つていないので、力が入らない。特に佐藤はほとんど何も食べていなかつたので、最初からバテ気味だつた。それでも葛山・越中沢を過ぎて、昼食の時までは快調だつた。途中法政大学山岳部が逆縦走してくるのに出合つた。越中沢の薬師側からの登りはかなりの急登で、下るにも少し手古摺る程だつた。スゴ小屋の手前当りから小石と佐藤の調子が悪くなつた。2人共熱があり、水つぽいものを吐いていた。しかしよく頑張つて12時少し過ぎに間山に着いた。もう他のパーティが大分先に着いており、良い天幕場はみんな取られてしまつていた。仕方なしに、それぞれテントを離して立てた。水は、雪溪の基部に穴をあけ、溜つた水を利用した。小石の熱は8度位、新たに田原が風邪の症状を訴えた。佐藤は食欲がなく、時

時吐きそうになつた。3時頃平木さんの最終判断で下山を決定した。私は最後まで続行を主張したが、1年生3人の不調、合宿の先の見通しを考へて薬師より折立への下山を決定した。私は口惜しかつた。ただただ残念でならなかつた。この時程2年部員の重責を強く感じた事はなかつた。何か熱いものがごみ上げて来た。夕方1年生に事情を話す段になつても、口元が引きつってなかなか言葉が思うように出て来なかつた。下山を決定したので、不用の食料や余分の石油を他のパーティに譲つた。

下山の日は皮肉なことに、入山の時のように雲一つない快晴であつた。前の晩は口惜しさで、愕然とした思ひで、ほとんど一睡も出来なかつた。佐藤を除く他の1年は元気だつた。人間とは困難に向かう時には、何かにつけて不安になり、些細な事にも驚いてその勇気を失うものだが、いざそれから解放されるとなると、多少の不無理さや困難はなんともなくなるものだ。昨日まで痛かつた足も今日は軽く感じられるものである。本当の勇気を持ち続けることの困難さを山は私達に教えてくれる。薬師までは快調に行く。山頂で、1年前、1年生の私が頂上に立つた時の事を思い出した。その時、何も分らず、恐らくは上級生に迷惑を掛けていた私が、1年後の今では下級生を連れて山に来ている。あの時の2年生の気持も今の私の気持も同じだろうか考えると、自分自身のぎごちなさが急に心の底にしみわたつた。そして1年生に周囲の山を説明している間も、目の前に大分近くなつた槍ヶ岳がちらついて、私のぎごちなさに追い討ちをかけた。太郎から次郎にかけてはニッコウキスゲの花が今を盛りと咲いていたが、何となく生気がなかつた。途中富士高山岳部の連中とすれちかつた。私達とはいかにも対照的だつた。

富山には夕方着いた。電車を降りる時、私はふとこれから合宿が始まるような気がした。そこには入山時の煩しさがあつた。しかし時間の経過と共に事の重大さが私に迫つて来た。結局今回の合宿では、責任者たる私の無力さがこのような山岳部始まつて以来の失策を引き起してしまつたのだと思う。今後私自身にもそして又我がクラブにも努力と向上を課していきたいと思う。

(木俣記)

⑥ 9月山行 - 北岳

◎ 参加者 (O.L)木俣, (S.L)在間, 古西, 田口, 永井; 荒木, 小石, 田原, 西井, 吉田; (O.B)上遠野氏

◎ コースタイム

9月21日 - 甲府 - 芦安 - 広河原 19:35

9月22日(快晴) 出発5:15—八本歯の頭12:40—北岳12:00—池山小屋15:20

9月23日(晴) 出発6:15—深沢下降点9:00—夜叉神峠入口10:40—芦安

北岳山頂からの抜群の、最高の、極上の……(あらゆる美辞麗句を連らねても誰一人としてナンセンスとは叫ばないだろう)眺望が我々に山の安らぎと深さを感じさせてくれたことは、この山行のすべてを象徴している。見上げると吸いこまれそうな高い空にはるかに続く南アの稜線がくつきりと刻まれている。これほどコンディションが良く万事がうまく遂行され各々が存分に山の良さを満喫できた山行は珍しい。

野呂川の流れを子守歌に一夜を明かした我々は他のどのパーティよりも早く(と言いたいが実はモタついて3番目か4番目) 広河原を出発し、一路大権沢の道を山頂へとむかう。1Pの休みでふと後ろをふり返ると人相の悪い運動靴で作業衣姿の男が親しげに話しかけてくるではないか。よくよくみるとそれは上遠野さんであつた。前夜新宿を立ち急いで追いついてきてくれたのである。沢の流れが次第にか弱くなり、伏流になつてしまつた頃、水を汲まずに來た我々は、いささか血迷つたが、雪溪の下にはきつと流れでているだろうという確信でそれをぬぐい去りつつ歩いた。そのためか幾度かベンキサインを見落してしまつたこともあつた。二俣に着くと我々の目の前にバツレスがその全容をあらわした。いずれは登るだろう岩壁を見上げしばし絶句。

途中昼食をとつて(水の心配は解消)八本歯のコルまで気持ちよく登る。積雪期はヤバイときかされていた八本歯の頭をなんなく越え、ザツクを置いて北岳を往復する。上遠野さんはここで昼寝。登りの途中、ヘルメのおにいやんに蒼白な顔で“遭難連絡のため道をあけて下さい”と言われ、気楽な気持ちで登つてきていただけにはつとした。下りは快調にとばし、昨日の幕営地とは対照的なひつそりとした北山小屋脇の草原に幕営。水場の往復40分(在間・中也の2名で行く)はいささかきびしかつたがとにかくいいところだ。夜は珍しくキャンプ・ファイヤでおそくまで騒ぐ。そこで展開された珍事の数々はいずれ別のところで披露する。

翌日も快適にとばし、いやな林道歩きも頑張り夜叉神峠入口へ。ここまでくればバスがあると思っていたのに見事に裏切られ、いささか意気消沈、ほこりと暑さの中を芦安まで歩く……。これはウソで実はトラックに便乗しちまいました。(在間記)

(7) 10 月 山 行 - 丹 沢 主 稜 縦 走

◎ 参加者 (O.L) 木俣, (S.L) 在間, 田口, 永井; 荒木, 田原, 西井, 鈴木, 吉田

◎ コースタイム

10月19日 一新松田一簗沢 18:00~18:25 - モロクボ沢出合 19:30

10月20日(曇時々晴) 出発 5:40 - 大室山 9:20 - 檜洞丸 14:00 -

蛭ガ岳 18:00 - 原小屋 19:20 - 東野 21:15, 5:00

秋のいろいろな行事のいそがしさの後, 1週間ぐらいたつた19日の午後学校を出発。暮営地はモロクボ沢出合あたりにした。夜そこを自動車が止つたりしていたので, どうも駐車場らしかった。

今日の行程の長さを考えて1年生をせかせて早めに出る。初め沢づたいに登り, 途中尾根を巻いて白石峠につく。こゝまで1Fで来たのがこたえたのか, 1年生はかなりバテていた。大室山までの道は歩きやすく快調に飛ばすコースであつたが, 1年生のバテがひどく2年生がどなつてもビッチがあがらなかつた。大室山で記念写真をとる(これは10月山行の3枚しかない写真の1枚)。犬越路で昼食をとり, 右手にずつと林道工事の小屋を見ながら急ぐ。その後も1年生のバテがひどく隊を別けなければならないこともあつた。ようやく檜洞丸の頂上につき, 休みをとつた。金山谷乗越を過ぎるころ, 1年生の1人がついに倒れてしまつたので, 荷物を2年生が持つたが, 熊笹の歩きにくさの中で, 以前と同じ様な状態で歩かねばならなかつた。白ガ岳についたのが夕闇迫る4時頃であつたので, 1年は肉体的, 精神的にもかなりくたびれていた。蛭ガ岳に登るころには日も暮れかゝり, 我々2年生もかなり動揺していたので, 夕焼の美しさがかえつて我々の心をさびしくした。蛭ガ岳山頂についたときはすでにまつ暗であつた。

蛭ガ岳の小屋でお茶を頂いて, 一応原小屋まで行くことにした。バテの激しい者の荷物は2年生が持ち, 困難しながらも原小屋に到着。そこで在間, 永井が1年生で元気な吉田, 荒木を連れて連絡をすることになり, 東野まで夜道を飛ばした。残りは原小屋に泊つて, 翌朝O.Bの平沢氏, 梶内氏, 上遠野氏, 3年の古西さんが車で迎えに来てくれて, そのまま帰京した。学校の授業には全員まにあつた。今回の山行は1年生の強化山行であつたにもかかわらず1年生が充分なトレーニングをしなかつたのと我々が1年の体力を過信したことがこの様な結果を招いた原因であろう。夜中にもかかわらず迎えに来てくれたO.B諸氏, 古西さんに感謝し, 今後この経験を生かして, 山行に望むつもりです。(永井記)

⑧ 11月山行 - 雲取山

◎ 参加者 (O.L)木俣, (S.L)在間, 永井; 荒木, 小石, 鈴木, 田原, 西井,
(O.B)滝口氏

◎ コースタイム

11月16日 一氷川一日原16:40-八丁橋17:25

11月17日(晴) 出発4:50-大ダワ9:30~10:10-雲取山11:10
-ブナ坂12:00-鴨沢13:40

八丁橋Fを幕营地とする。

朝早く、まだ暗いうちに出発する。1Fまでは懐電をつけていった。途中1年がバテたが、コースタイムをかなり上まわる速さで大ダワにつき、昼食をとる。11月はやはり寒い。昼食時セーターを着ていても震えつばなしである。そこから雲取山まで順調に行く。雲取は2年生にとつては3回目、4回目というなじみ深い山であるが、1年生は全員今回が初めて。天気も良く、地図を開けて遠くの山を観賞、あとは鴨沢までつづばしつた。

(永井記)

⑨ 春山偵察 - 仙丈岳地藏尾根

◎ 参加者 (O.L)木俣, (S.L)在間, 田口, (O.B)山野氏

本年度の春山合宿は仙丈岳地藏尾根を变形ポラでやろうという事に決まり、計画を具体化してきてここで偵察を行なうことになった。この新しい形式の山行を行なうにあたって、2年が全コースを把握する必要があると考えたのである。しかしこの春山と偵察の話聞いた顧問教師(山をほとんど知らない)が山の経験者に聞いた所、我々が春山でこのコースを行なうのは無理であるから止めよと言つて来たのである。この事から問題は発展していくのだが、ここではともかく行なつた偵察の記録を書こう。

◎ 11月22日 新宿 - 伊那北 - 高遠

出発間際に一人不参加となる。これは言うまでもなく、たいへん反省すべきことである。その夜遅く我々は高遠に着きバスの待合室に泊めてもらつた。

◎ 11月23日(快晴) 一市野瀬7:00-黒岩沢ノ頭10:35~11:25-

一番バスで市野瀬へ。そして朝の澄んだ大気の中を霜柱を踏みつつ、予定より重くなつたキスリングを背負つて、この長い尾根を登り始めた。赤布をつけながらの登りでもあるし、相当時間がかかるだろうと思ひながら、一步一步じっくり進んでいつた。天候は快晴、吹く風はひんやりと冷たい。高見石の辺でようやく展望が開け、錫岳が望まれた。このあたりがBCに適していそうだった。我々はヤケガレの頭、穴沢の頭を右にまき黒岩沢の頭にて昼食にした。差し入れのみかんがうまい。松峰は頂上とまき道の二手に分かれて行き『松峰小屋へ30分』という道標の所に着いた。これを見た時はうれしかつた。小屋までまだ1時間以上かかるだろうと思つていたので。小屋に着いてみると尾根は半分なかつたが、その他はたいした損壊はなかつた。この附近がCIとなるだろう。その夜は小屋で星をながめながらテントをかぶつて寝た。

◎ 11月24日(快晴) 出発4:50—森林限界7:00—仙丈岳9:00—松峰小屋
11:20~12:35—市野瀬

まだ暗いうちに出発。暗いせいか地蔵をまき道がわかりにくい。そのまき道の途中で初めてほんの少し残つた雪を見る。それから先の道は雪が氷になつていたり、くさつていたりした。春、この辺はラツセルに苦しめられそう。しばらくして森林限界を越え、眼前に大きく仙丈岳が迫る。雪をふみハイマツの上を歩きながら自然と足が速くなる。馬ノ背分岐まで途中両側断崖という所を1、2か所通つたが、別に大したことはなさそう。この上は一面の雪、しかも堅く気持ちよくアイゼンをきかして登る。20分程で山頂。すつかり晴れ上がり360°の展望はこの上なくすばらしい。春山のアタックの際もぜひこんな天気であつてほしいものだ。馬ノ背分岐で今まで付き添つてくれた山野さんに別れを告げ、登つて来た道を快調にとばして下る。森林限界あたりにCI=A0の位置を確認し、朝暗くてわかりにくかつた地蔵岳付近に赤布をつけて小屋へ。途中初めてこの尾根で他の登山者一人に会つた。小屋で昼食後、サブからキスリングにかえて出発。黒岩沢の頭では今山行最後の仙丈岳を眺め調子よく下る。ここから行きに3Pかかつた行程を1Pで市野瀬に着いた。何かとても気分爽快、充実感がわいてきた。この偵察の結果として、技術的に困難な所は非常に少なく、今後の体力養成が順調にいけば、今年の春山は十分やれるのではないかと強く感じた。

(田口記)

(10) スキー合宿 — 杵池高原・御殿場小屋

- ◎ 参加者 男子 (O.L) 木俣, (S.L) 在間, 田口, 永井; 荒木, 小石, 西井, 吉田
女子 依田; 甲斐, 坂田, 嶋田, 東郷
(O.B) 三浦等氏, 三浦潤氏, (O.G) 高木さん
中村先生, 小林先生 (with his son)

- ◎ 12月25日～31日

今年は去年と同じ杵池である。出発前は雪がない、スキーができないとずいぶん気をもんだが、間際になつてようやくなんとか滑れる程積雪があり、ひとまずほつとして25日の夜行に乗つた。

26日朝早く信濃四ツ谷に着く。列車を降りると、ひんやりと冷たい空気が眠けを吹き飛ばし、心は早くもグレンデへ。雪が少ないせい、去年は親の原までしか行かなかつたバスが東急山荘まではいつていた。雪の上で朝食後リフトで登る女子と分かれて登り始めた。男子の入山は春山に備えて、40kg程の荷を背負つての雪上歩行の訓練のため歩くことにしていた。しばらく行くと2P半程で目指す御殿場小屋が見えたので、このPで着いてしまおうと皆声をかけてがんばる。途中一年が一人遅れ出すが、2年やO.Bに励まされてがんばり、合計3P4時間程で小屋に着いた。昼食後食糧テントと雪中のテント生活訓練のためのテント2張を張り終えてから、杵ノ森グレンデへ初滑りに出かけた。下の親ノ原のグレンデが雪不足のためか、ここは人がいつばいで我々の滑る余地もない程であつた。しかたなしにキツクタンの練習だけでもどる。

27日以後、練習は小屋から少し下つた所にあるハンノキコースの途中の適当な斜面で行なわれた。最初は直滑降。O.Bの親切な注意がとぶ。“ケツを出すな” “肩の力を抜け” “膝をやわらかく” etc. 次に斜滑降、ボーゲン、山回り、シテムクリス、モヤニアと各自の上達に応じて練習していく。今年の一年には2年よりうまいやつがいる。天候は合宿最後の日を除いて曇時々晴、晴れた時には後立山連峰がすばらしく望まれた。26～29日まで各自2晩づつ冬天生活をした。やはり一年は初めてのためか動作が鈍く、失敗も少なくなかつたが、これを良い経験として、春山に生かしてほしい。なお30日には夜全員でコンパを開き、歌やゲームなどで楽しく最後の夜をすごした。

31日、下山である。天候は今合宿初めての雪。東急山荘までバス道をスキーで下る。途中で先に出発した女の子を追い抜く。東急山荘からグレンデを下るが、雪少なく石にス

キーがとられてはズデーオンとなる。親ノ原からはバスで白馬大池へ。 (田口記)

(11) 1 月 山 行 —— 乾徳山・黒金山

◎ 参加者 (O.L)木俣, (S.L)在間, 永井; 荒木, 小石, 田原, 西井, 吉田,
(O.B)山野氏

◎ コースタイム

1月25日 一塩山ー徳和16:50ー錦晶水18:40

1月26日(晴) 出発6:50ー乾徳山9:00ー笠盛山10:20ー黒金山11:
30ー徳和14:20

徳和から歩き始めて、途中から雨となる。錦晶水につき、幕営。明日の天気心配なので夜天気図をとつたが最悪の天気図で晴れる見込みは全くない。運を天にまかせてその夜は、雨の音を聞きながら眠りにつく。

翌朝目をさますと、雨が上がり天気も良かった。月見石までの道は雪もなく、そこから乾徳までもそれほどはなかつた。乾徳山の最後のつめの所はずつと岩場となつていて、雪もついていた。山頂から降りる所は北面で、前よりは雪はあつたがラツセルをするような所ではないが、くるぶし程はあつたのでスパッツをつける。今山行は昼食をration形式をとつたので、笠盛山をすぎて、各自休みごとに食うようにした。黒金山では見晴らしも良く、奥秩父の稜線などがはつきり見えた。そこから1年にトツプをやらせ、大ダオから一気におりた。1年をトツプにしたのはトツプの勘をつかませるためである。下は天気が非常に悪かつた。この日は乾徳山から見えた雲海(1000mぐらい)を境に、上は快晴下は悪天となつていた様である。 (永井記)

(12) 春 山 合 宿 —— 八ガ岳夏沢峠定着

◎ 参加者 (O.L)在間, (S.L)田口, 永井; 荒木, 田原, 西井, 吉田, 古西,
水口, (O.B)三浦等氏, 梅原氏

本年度の春山合宿は当初、仙丈岳地蔵尾根を極地法を模してアタックするという新しい方式を採用した計画であつた。ところがこの計画の是非に端を発して、事態は我がクラブの存続問題にまで発展し、チーフ・リーダーである木俣の突然の退部によつてさらに深刻化した。1度は、こんな時に春山の事など……という気も起つたが、残つた者の不屈の意

志とO.Bの援助によつて、幾多の曲折はあつたものの、ようやく下記のような春山を実施することができた。

◎ 3月26日(快晴)

一小海7:20~7:40-新聞8:15~8:30-稲子湯10:00-ミドリ池
15:30

春山の入山はいつもながらキビシイ。全員40kg近くペースが速く感じるようでも実際はあまりかせいでいない。ミドリ池下の急登で田原が遅れ、カタツムリのように進む。ミドリ池に着いた頃は全員かなりバテていたので、夏沢峠までの予定を変更して幕営。ここまでは殆んど雪にもぐるようなことはなし。

◎ 3月27日(快晴)

出発 6:55-本沢温泉 10:00-夏沢峠13:30

いよいよ本格的に春山らしくなるところだ。尾根を乗越すあたりからは、ところどころかなりもぐり始め重荷のせいもあつてなかなか進まない。本沢温泉で昼食をとつてからは夏沢峠までのトレールの判然としない道を行く。トツプはボコボコもぐる雪に気をとられてか、ルートのとりがまずい。1度全員で交代してラツセルをやつたが荷が大きく追い抜きがスムーズにいかないのをやめた。峠に着くと、小広いところにベース・キャンプを設営。八ヶ岳は強い西風があると聞いたので、寒風に頬を上気させる図を想像したのだが、山行中稜線上でもほとんど強風に会わなかつた。

◎ 3月28日(晴)

午前中、硫黄の北斜面にてキックステップ訓練。雪が軟かくて多少のゴマカンにしてもふらつかないので、あまり効果がない。午後は天狗往復。根石の南斜面には全く雪がついていずぬかるみを歩く。興ざめ。縦走路は全般的に雪が少なく、あまり面白くない。

◎ 3月29日(雪のち雨)

アイゼン、オーバーシューズ、ピツケルのいでたちで硫黄登頂。やつと春山の気分。下りは岩や氷が岩の露出している登山道を選び、アイゼン練習として、上方に注意しながら沢筋を下る。昨日と同じ場所でアイゼン登降訓練を行なう。本州南岸に低気圧が停滞して

いて、気温はちつとも下がらないため、午後から雨になる。

◎ 3月30日(みぞれ時々雪)

停滞。きわめて天候が悪い。テントの中でズツコケてばかりいた。そろそろ テントが沈み気味で水が溜り排水作業に精を出す。

◎ 3月31日(快晴)

出発 6:30 - 本沢温泉7:50 - ミドリ池9:00 - 新開12:00~12:50 - 海尻13:40

もう下山か、という気がする。入山の際にもぐつたところも朝のうちのせいか表面がクラストしていて快調に下る。入山の時よりもめつきり雪が減っている。新開までは田口がやけにとばし4Pで着く。ところが、永井のピッケルがないことに気づき大騒ぎ。結局昼食時に置き忘れたものと断定し、放棄。(後日、所有者の小川氏に謝罪)。バスのないので海尻まで歩くことになり、一同ガツカリ。もやもやした暑さの中で春山合宿を終える。

* * *

今回の山行は準備過程からみても、又内容からみても1年間の集大成とは言い難い。計画はにわか作りのラフなものであつたし、私自身、初めてのリーダーの重責を任つた訳で、不手際が多く、O.B., 3年生に判断を頼る結果になつてしまつた。又、山行内容が基礎訓練中心になつてしまつたが、できれば今後春山の前段階でそれらのある程度修得し、春山では応用としてポーラや縦走といった形式をとつていき、春山合宿をより充実したものにしてほしいと思ふ。

(在間記)



1968年女子

(1) 5月山行 — 鷹ノ巣山

◎ 参加者 (O.L)藤田, (S.L)依田, 入戸野, 山田; 東郷, 吉沢; 伊藤, 甲斐, 嶋田, 東郷頼子, 坂田; 中村先生; (O.G)佐久間さん, 高木さん

◎ コースタイム

5月12日(晴) 氷川—水根9:05 — 鷹ノ巣山13:15 — 中中原15:40

前日, たぶん眠れなかつただろう1年と, 上級生から, 女子の5月は迷うなどと言われていたため, (かどうかは知らないけど), 眠れなかつた2年は, そんなことは, 微塵にも出さず, 意気揚々と山道を登り始めたのである。左手に谷を望み, わりに平坦な石ゴロ道に行く。初めて見るというワサビ田を横ぎり, 前よりは少し, 急になつた道を登つて行く。途中, 危つかしい橋があり, その度上げる1年の怪奇な悲鳴で, 1年前の自分を思い出し, 1人でニタニタ。木立ちの中での昼食。この時だけは, みんな恵比寿顔。1年1人が, おにぎりを9つ持つてきたとかで, みんなして大騒ぎ。再び, パックしていよいよ頂上へ。それから30分ほど歩くと, 眼前が急に開ける。あまりのそこにいる人の多さと明るさにただただびつくり。気持ちよさそうに昼寝している人を横目で見ながら通り過ぎ, ふと目をあげると頂上らしきものが見え出す。少し, おくれそうになつた1年も, はりきり出す。しつこくがんばり, 頂上着。やはり, うれしい。けど霧がかかつていて展望はきかない。いつもはおいしく感じる粉末ジュースもなぜかわびしい。稲村岩尾根を下る。意外に急だが, 1年はあまりすべらない。途中1回休憩をとるが, 下りということとも重なつてか, 1年もしゃべるようになって楽しい。…………。

ついに中中原着。1回も迷わなかつたけど, 何故か非常に疲れてしまつた。(吉沢記)

(2) 女子夏山合宿 — 薬師~高山

◎ 参加人員: (O.L)藤田, (S.L)東郷, 入戸野, 山田, 吉沢; 甲斐, 嶋田, 坂田, (O.B)梶内氏, 三浦(潤)氏, (O.G)岩崎さん, 佐久間さん, 高木さん, 羽柴さん

◎ 8月5日(晴) 上野7:40 - 折立17:30

発車のベルが鳴る瞬間のむなしさ。それに加えて、乗客の珍しそうな目。いつものずりずりしさと夜行でたつときのような緊迫感はなく、皆ゆつたりと、しかし小さく座わり外を見る。日本海を見てみると、ふと今日に至るまでの経過が思い出される。コースは決定したものの、学校側からの夜行使用禁止令。そのためどうしても、特急使用でなければならないという事態……。ひいては、女子の合宿とは?ということにまで発展し、いろいろ考え、議論した末での今合宿。しかも、2年1人の健康上の不参加。それだけに、がんばろうと思つての出発だつたつけ……。富山着。事前にチャーターしたガイド付、西都立女子高校様と書いたマイクロバスの出迎えをうける。途中、雨が降りだす。なんだかわびしくなる。折立着。ここで佐久間さんと涙の対面。

◎ 8月6日(曇) 出発5:50 - 三角点8:40 - 薬師峠14:15

苦しい登りのはじまり、はじまり。遭難記念碑を見ながら、急坂を登る。1P目、1年は意外に元気そう。次郎兵衛平と称する所まで、五光岩を見ながら、しつこくがんばる。次郎着。昼食。水揚はすぐ近くにあるが、あまりきれいではない。昼食時間をわりに長くとり、太郎へ。太郎まではあと少しと1年を励まし、ついでに自分をも励しながら行く。太郎小屋の赤い屋根が目映る。ここで三浦潤さんと合流。今まで男一匹だつた梶内さんもうれしそう。まだ一段と夕食も楽しくなつた。そして、「あのコースは薬師岳があるからいい。」と言つた尾形先生の言葉を信じつつ明日を期待して眠る。

◎ 8月7日(曇) 出発6:35 - 薬師岳8:35 - 帰幕11:50

いよいよ今日は薬師の頂上へ立つ日。はり切つて目を覚ます。だが、天気はあまりよくない。空身なので、ゆつたりとした気分で登る。きのうのあの重い荷物と比べて、なんと身の軽いことか。手と足をばたつかせるだけで飛べそうな感じ。モダンな休憩所を通り過ぎ……。頂上! 感慨無量の面持で、周囲を見渡すが、何も見えず、おまけに人が多く、寒くて……。しかし、キャンデイをめて、ジュースで乾杯! 帰りは、草原の中で、昼食とおしゃべりとゲーム。その後、夕立ちに会い急いで帰幕。

◎ 8月7日(曇) 出発4:45 - 上岳7:03 - 黒部五郎11:27 - 幕営地13:

30

今日の行程はいささか長い。気をひきしめてかかる。2Pとちよいで上ノ岳通過。快調！この辺一面はお花畑だそうだが、どんより曇つていて何も見えない。しかし暑いときよりは、ずつと歩きやすく、ありがたい。中俣乗越で昼食らしきものを取る。その後すぐ、雷鳥の親子に会い。皆、一斉にわめき出す。五郎への登りは、石がゴロゴロしていて、まことに歩きにくい。頂上。カールに散在するテントがかわいらしい。かすかに遠くの山々も見える。雪溪をおりて行く。足元にゴ注意！ 期待した以上にすばらしい幕営地。水の豊富さ。水の音。大きな石の上にたつとまるで自分一人が、別世界にいるような錯覚を起す。いやに感傷的気分から抜け出た時、夜の帳もあり、待望の花火大会。そして、雨。

◎ 8月8日(曇のち雨)

出発 6:45 - 三連 10:54 - 双六岳 14:15 - 双六小屋 15:

38

今日の予定は、三連までだが、天気とこれからの予定を考え、双六まで行くことにする。すばらしいカールに別れを告げ、歩き出す。1Pで黒部乗越。途中、何人もすべつたり、ころんだり。五郎小屋の後の道を登る。木がいつばいで展望はゼロ。今となつては女子の名物となつたアイトの連呼をして、頂上へ。ここで昼食。双六岳へ向い出発したものの、道をまちがえてあわててもどる。クロユリの花、咲き乱れる道をスタスタ行く。進むにつれ、霧がかかってくる。ハイマツの中をかき分け、頂上に着いたが、寒さのため、早々とひきあげる。でも、霧の中のこの殺風景な頂上は、私のお気に入り、そう思つたのもつかのま、ついに雷を伴い、雨が降り出す。モーレツな雨である。ポンチョをつけ、眼下の双六小屋めざして下る。途中、捻挫する者1名あり。小屋着。急いで、テントを張ろうとするが、手が冷たく、なかなかはかどらない。けど、皆の顔を見ると(それこそ、顔自体は雨と汗でぐしゃぐしゃだけど)真剣そのもので、人間同志の何か淡いものを感じる。雨は依然、強く降つている。なにせ寒い。ラジウスをつけ、体を暖める。雨にうたれたためか気分が悪くなる者4名。熱もある。一心配。

◎ 8月10日(晴) 出発 8:35 - ワサビ平 15:25 - 新穂高 17:04

一晚寝て、大部分の人は、前の調子にもどつたが、まだの人もあるので、出発時刻を遅らす。まあ、下りだから元気を出して、ポチポチ行こう、ということになり、出発。ゆつくりとしたピッチで、平らな道を行く。今合宿天気には、恵れていないが、下山する日に

なり、晴となる。(何か悪いことでもしたかなあ)。大ノマ乗越で初めて槍を拝む。さあ谷底めがけて下降開始。サラサラした道を非常なほどの暑さにも負けず、黙々と下る。昼食も暑さのためあまりはいらない。水の音はずれども、姿は見えぬ。まだ着かない。まだ……。ついに川に着く。あまりの水の豊富さに、おもわず飛び込みたくなるが、そこは顔など洗うだけでがまん。生き返つた感じで、大きな石の上をビヨンビヨンと飛ぶように歩く。ワサビ平着。が、ここは幕営禁止地区になつたと言う。しかたなく、新穂高まで行くことにする。平坦な道を焼岳を見ながらヤケになつて足を動かさず。ついに新穂高着。気分が悪かつた人も大分治つたようだ。合宿最後の夜、献立は女子御自慢の五目寿司。食べ、歌い、かつしゃべる。暗い空に映える、焼岳の白い煙。車の音と川のせせらぎ。その中で、経験者のみがもつたろう幸福感と自己満足的な陶醉にしばし浸る。1年にとつては、長かつただろう合宿。でもその中から何かを感じ取つてくれただろう。そして、2年はとどのつまりは、O.B.、O.G.に頼つてしまつた感があるが、なにしろ無我夢中だつた。そんなことを考えているうちに、明日の予定は、上高地に行かず、高山に出ることに変更になつた。

最後に、最初からいろいろな面でお世話になつたO.B.、O.G.、3年の方々、ほんとうにありがとうございました。(吉沢記)

(3) 9月山行 — 飛龍・雲取

◎ 参加者 (O.L) 依田、甲斐、嶋田、東郷; (O.G) 高木さん、佐久間さん。

◎ コースタイム

9月21日(晴) — 氷川 — 丹波

9月22日(晴) 出発5:30—サオラ峠8:25—三条湯10:40—禿岩15:25—帰幕18:00

丹波の幕営地、ちょうど空が明けかかる時出発。考え考え歩くうちに道の方はこうばいを増す。夏山に行かなかつた1年があるので心配だ。だいぶ苦しうだが、みんなで励ましあつてがんばる。久しぶりの20余kgは重い。ぐいぐい体を引つぱつて行く。赤土の道が広がつて空が開けるとサオラ峠。ちよつと休憩。今度は三条湯まではりきつて行こう。さつきとはりつてかわつた細いトンネルのような道をタツタガ下る。調子がいい。平らな巻き道を経て最後に少し登りだ。小屋が見えてきた。暗いじめじめした所だ。すぐ

昼食。あいもかわらずカンパン。一息ついたら空身で飛竜往復だ。急な登りだが、早いピッチでどんとどんとばす。荷物が軽いつてこんなに楽なことだつたのか。カンバ谷源流・ゴングン谷源流を通過。朽ちかけた橋や一本橋やらどんどこ出てくる。1年のこわがること……。少しいくとかなりの急登が待つていた。ヒーヒーヒーで北天のタル。予想に反してきたない場所だつたので休まず禿岩へ。展望を期待していたのに生憎ガスつてなんにも見えない。飴をしやぶつて一服すると、すぐ又三条湯へ走り下る。コースタイムを1時間近く上まわつたにも拘らず着いたらまつ暗け。懐電を頼りに大急ぎでテントを張り、食事。もう寝ようかなというころ、オーのかけ声とともに佐久間さん現われ、高木さん急に勢いづく。今日はずいぶん歩いたなあ。明日もこの調子でがんばろう。

◎ 9月23日(晴) 出発7:10-雲取山12:50-鴨沢17:20

今日は雲取。天気も良いし滑り出し好調だ。1時間ほど行つて休憩。地図を出して見る。ここでまちがえた。もつと進んでいると思つたのだ。それで次は休憩なしで三条タルミまで、と決めてしまつた。ところがところが1時間いつても着かず、あと30分いつてもまだ着かず。サックは肩にのめりこむし、日はカンカン照りつけるし、少々バテてきた。1年が氣力をなくし、「まだですか」をくり返す。声をかけ、追い立てて、とうとう歩いてしまつた2時間25分。疲れた。日蔭でグタツとなる。失敗したな。規則的な林みの意味を思い知らされた。30分も休んでしまつた。今度こそ頂上まで。急なガラガラした登りだ。1年の1人が精神的にバテてしまいかなり手まどつた。しかし登るよりほかに道はないので1歩1歩励ましながらいよいよ着いた。早速昼食。満足してはじめて回りを見るとまたガス。よくよく天気には見放されているらしい。あとは下る一方だ。ひざをたよりにボンボン下る。ブナ坂通過。だんだん木が多くなる。枯葉をけ散す。この下りでトップの難しさをつくづくと知つた。いつもは後から号令を掛けるだけだけど。どうもめちやくちやに走つてしまつた。1年は遅れがちだ。足もとがふらついてきてすぐころぶ。気をぬかないで最後まで。向い側の山がぐんぐん広がる。足が勝手に動き出す。「あつ、奥多摩湖が見えた。」

鴨沢に着いたら予定のバスは少し前に出ていた。暗い中の1時間。反省することは数多くあるが、とにかく終つた。

バスが来た。ほつとした。

(依田記)

(4) 10月山行 — 三頭山

- ◎ 参加者 (C.L) 依田, 甲斐, 坂田, 東郷, 嶋田
(O.G) 高木さん

◎ コースタイム

10月20日(晴) 氷川8:30—鞆口峠11:50—三頭山13:25—数馬
15:00

紅葉が良かった。楽だった。歩いてみると気持ちに余裕があった。これがこの山行に対する感想だ。だけどこれが5月だったら同じ三頭だつてこうはいかなかつたらう。皆の力が充実してきたから。歩調がそろつたから。この力をもつと高度な所へぶつけることもできたかも知れない。でも10月の詰つた日の中でこうした山行があつてよかつたと思つている。

ドラムカン橋をユラユラ渡ると、イヨ山方の道がとざされている。工事中だ。そこで1年の5月山行でいつたコースを鞆口峠まではとることにした。湖に沿つてしばらく行き、登り出す。なんてこともない道。前に来た所だが、季節の違いのためか大分印象が違ふ。2回休憩を取り空腹を感じ出したところには、峠への最後の急登。ここで昼食、ラジウスで沸かしたお茶がとてもおいしい。

頂上へ。着実なペースで調子よく進む。途中、紅葉がとてもきれいだ。有名な観光地と違つて山の葉っぱはいつしようけんめいでうれしくなる。最後のがんばりをきかせて、さあ頂上だ。あまり良い天気とはいえないが、六ツ石、七ツ石などが見えた。おせんべをかじり、りんごのしんを湖にむかつて投げた。今度は下り。鞆口峠まで一気にかけ下り、そのまま続けて数馬へ。途中小さな滝や俗なつり場があつた。道を広げる工事にあつた。もつと俗にするつもりらしい。林をぬけてトットコ行くと停留所だつた。(依田記)

(5) 11月山行 — 大菩薩峠

- ◎ 参加者 (C.L) 高木, 甲斐, 東郷

◎ コースタイム

11月17日(快晴) 一塩山—裂石4:45—上日川峠7:00—大菩薩峠9:15
~11:20—橋立14:55—氷川

前夜、夜行で立つ。新宿駅ではぐれたり身体の調子が悪かつたりした人が出て、結局
0. G, 1人, 1年2人となる。

暗い中を懐電で照らしながら行く。登山者がいやに多く、最初は行列であつた。空は満
天の星。なんとなく空が白み始めたと思つたら朝になつていた。霜柱がサクサクと音をた
てる。ひよいと振り返ると富士山がくつきりと大きく見えた。苦しくなると振り返つて見
ては自分を慰める。すすきの急斜面を登ると雷岩。風が強い。人がうじやうじや。頂上は
展望の悪いつまらないところ。大菩薩峠で昼食。ドッグパンとシチュー。ラジウスがなか
なかつかない。5回目にようやくつき、豚肉を炊めて食べる。パンがおいしい。風の強い
中を下る。指先と耳が痛い。枯葉の積つた道をガサガサ下る。長い長い下り。休憩で空を
見上げたら眠くなつた。再び下り。速くに奥多摩湖が見える。いつのまにか停留所に出た。
楽しかつた。 (甲斐記)

(6) 3月スキー合宿——八方尾根黒菱小屋

◎ 参加者 (O.L) 依田, 吉沢, 甲斐, 嶋田, 東郷, 藤田, 山田; 水口
(O.B) 平木氏, 上遠野氏, 八島氏

◎ 日 程

13日~14日 新宿23:45—細野9:00—黒菱小屋10:50

15日~17日 スキー練習

18日 黒菱小屋13:30—細野16:10

リフトの終点からゲレンデにホコボコ穴の行列を作つて黒菱小屋に着いた。調理場と便所の
間のまさしく女中部屋につつこまれた。何か言いたい感じだ。だがまああきらめた。昼食
を済ましてしばらく昼寝をしてから練習。今までの復習をする。教えて下さるのは平木さ
ん、水口さん。やっぱり八方はいい。大きくて。もつとも今の私達では十分楽しめるだけ
の実力は無いが。

2日目。8時半練習開始。ブルークボーゲン。斜面にストックを立てて何回も回る。午
後は5時まで斜滑り。雪が降り出す。みんなうさぎみたひになつて小屋に戻つた。食事の
仕度は主に1年の役目。見ているというのは初めてでどうも気が落ち着かない。女子のスキ
ー合宿ではこの後の時間が楽しい。差し入れを食べ、おしゃべりをしてグラグラ笑う。

3日目。“斜滑り山回り”にあけくれた。同じ場所にばかりいてもつまらないのでTバ

ーリフトで上へ行くことにする。ここで私が腹痛をおこした。慢性盲腸で時々痛みが出るのだ。小屋で休むことにする。皆はTバーへ。後で聞くとところによると落ちたり、宙づりになつたり大へんだつたらしい。午後は一旦出たが、風雪がひどいのですぐ戻る。

4日目。午前中シュテムボーゲン。みんな少しずつではあるが上達するようだ。午後3年生が帰る。急にさびしくなつた。

5日目。みんなは練習。私はまだ少し痛いので残る。寝ていると、「おいつ依田、何か食わせてくれ。」というものすごい声が出た。びつくりしてとびおきると上達野さんだ。そのすぐ後、小屋のオヤジが「訪問者です。」という。出ていくと又もやびつくり。八島さんだつた。これで再びにぎやかになる。午後は1年を先頭に下の方までおりる。

6日目。今日は最後の日だ。ようやく晴れたので第1ケルンまで登る。とても気持が良い。白馬の方まで見えた。リフトの横の大斜面を降りる。ウェーデルンですつとばしている人達の中を我々はこちらがりながらおりた。最後のところで1年が足をいためてしまつた。この時はたいしたことないと思つたが、後日、骨にひびが入っていることがわかつた。

午後、荷物をまとめていよいよ女中部屋ともお別れだ。兎平までザックをしょつて登る。回りの人に好奇な目で見られた。リフトにザックを乗せ滑り出す。ケーブル終点まではころびながらもどうにかこうにか。ケーブルで荷物とけが人をおろし、いよいよパノラマコース。O・Bが1人ずつついてくれた。最初は急でアイスパーン。こわいことこわいこと。横すべりや山回りを使つてゆつくりおりる。1年の方がずつと度胸があつて2年は情けない。後半は傾斜もゆるくなり、ボーゲンでスイスイと。こうなると面白くてギャツプもどんどん跳びこえる。

細野に着いたのは4時だつた。雪ともお別れだなあと思いつつバスに乗つた。

(依田記)

1969年 男子

(1) 新入生歓迎会 —— 川苔山

◎ 参加者 男子—3年3名, 2年5名, 1年10名, 女子—3年2名, 2年3名, 1年8名; 猿渡先生, 中村先生 (with his son) (O. B.; O. G.) 多数

立川7時集合。電車に乗つたのはよいが、連休のせいかいつもにない混みようであつた。1年がこの状態に耐えられるかと心配しながら氷川へ向う。バスも又混んでいて、ザツクの始末が大変だつた。9時5分川苔橋着。体操をしていよいよ出発だ。天気が良いせいかわ綿のスポーツシャツでも暑い。1F目。快調に進む。最初の休憩では下の川に降りて冷たい水を浴びる。山の水はいつ来ても気持ちが良い。やつと暑さがおさまつたというところで再び歩き始める。やがて山道に入りやつと山に来たという感じである。1年も頑張つてゐる。10時45分、百尋の滝着。滝のしぶきを浴びながら記念撮映。15分休憩の後、待ちどおしい塩地谷小屋へ足を運ぶ。1年も多少疲れたようであつたが、貼紙に励まされて元気づいた。塩地谷小屋着、11時35分、先発の2,3年やO. B., O. G.の方々が出向かえてくれた。さつそくカレーを配つて1年にサービスする。歌を歌つている間、2年は食器洗いに大忙し。だが、時間があるといつて油断してしまつたので、出発が30分も遅れてしまつた。さあ今度は山頂へ。みんな充分休憩して元気を取り戻したようだ。出発後、ゆつくり進む。14時40分踊平。もうすぐ山頂だ。これからあの階段を登らなければならぬ。でもゆつくり歩いてきたせいか、それほどきつくはなく、割合早く山頂に着いた。1年の女子がひとり腹痛を起こした他は、皆元気だつた。山頂からのながめは抜群だつた。あとは下りだけ。杉木の間を抜けて、どんどん下る。今年は例年より時期が遅いせいか、すみれも去年に比べるとどくわずかしか咲いていなかつた。やつと鳩の巣の町が見えてきた。上から見るとおもちゃのように小さく静かだつた。鳩の巣着、18時5分。予定より1時間25分も遅れてしまつた。全く申し訳ない、きよりは楽しかつたけれど、精神的に疲れたような気がする。(嶋田記)

(2) 雪上訓練 —— 谷川岳幽ノ沢

◎ 参加者 在間, 荒木, 吉田, 田原, 西井 (O. B.), 三浦等氏, 榎原氏, 三浦潤氏, 山野氏, 岡田氏, 永井氏

◎ 5月4日～5日

朝5時。まだ明けきらぬ朝もやの中を一路上野駅へ。2日間の新入生歓迎会が我々に与えた肉体的疲労はいやがおうにも荷を肩へくいとませる。早朝ながら、2年女子2名の見送りを受け予定どおり7時の新潟行急行で出発。睡眠中での乗り物の旅はあつという間に過ぎ去り10時、土合に降り立つ。いよいよ歩き出す。道は谷川岳東面のおもな沢の末端を横切るように湯檜曾川に沿ってたんたんと続いている。かなり早いペースのため1Pで芝倉沢合に到着。色とりどりのテントで埋まる中に空地を探してテントを張る。まもなくOBの人たちが一ノ倉岳から帰つて来たので小憩の後、一ノ倉沢見物に連れて行つてもらふ。一ノ倉沢は以前写真などで見たよりは一層迫力を増し、青味がかつた垂直壁の放つ、我々を飲み込んでしまうような威圧感は、この非情なる岩壁に散つた数多くのクライマーたちの魂を永遠に宿しているかのようであつた。これを見物した後奥ノ沢にはいり直ちに雪上訓練を開始した。まず初めはキツクステップから。午前中ののんびりムードとはうつつで変つて皆真剣な表情である。始めのうちは雪に対してどうにか一発でステップを決めることができたのだが、しばらく続けているとしだいに足が重くなり2回、3回と蹴り込まなければ足場が安定しない。そしてそのたびにちようだいするのがOBのどなり声。雪溪を下る時の吸い込まれて行きそうな恐怖感とOBのどなり声の恐怖の中での身の縮むような、3時間であつた。その日は一応キツクステップだけにとどめ明日キツクステップの復習と滑落停止を行なうとのことで終りになつた。

翌朝4時起床。きょうも絶好の訓練日よりだ(感慨無量!/)。これからのことを考えるとパーティから逃げ出したくなる。午前前半はキツクステップの復習だつた。現役一人にOB1人が付添うという一対一の理想的なもので指導は充分に行き届いたが、皆疲労ぎみで余り調子が良くないようであつた。最後にトラバースをやつたがこれは蹴り込む斜面が体の横にあるためなかなかうまくステップが切れず何度も滑落しそうになつた。次の休憩の後、今合宿の真髓である滑落停止の訓練に移つた。はじめはうつぶせの姿勢でのピックの打込みの練習だつたが、ピックの打込み角度が悪いらしくなかなか止まらなかつた。そしてこの動作に反転を加えるわけだがその反転のやり方が悪いと石突がひつかかたりして流されてしまう。それを受け止めるOBも大変だ。いつたい何十回やつたのかとびしよびしよのヤツクを見つめる頃、日は高く昇りまもなく昼食の時間だつた。日なたとはいえ山肌を吹きなでる風で少々寒かつたが、前方の白ケ門～勅田岳と続く湯檜曾川対岸の山々が薄い緑色に輝き、にわかには初夏の訪れを告げていた。

昼食後再び滑落停止をくり返したが、なぜか皆、午前中とはうつつ変つて動作が鈍くなり完全に停止しない回数の方が多くなつていつた。11時半を少し過ぎた頃、吉田が休憩前のラストワンという時に反転に失敗しブレードで顔をなでるようにして20m程流され、そのまま倒れてしまつた。ブレードでほおを切つたのだつた。このためOBの梅原さんの指示により三浦潤さんが一ノ倉沢出合にある救護所へ連絡に走り吉田は他のOBの人たちによつて群馬県警察局の車で水上の外科医院へ運ばれた。幸い9針の縫合で済み、全治10日間という軽傷であつたが、OBの人たちに大変な迷惑をかけてしまつた。その間に本隊は訓練を中止しテント撤収の後土合へ向かつた。土合で全員集まつたが思わぬアクシデントの為何か皆ぼろ然とした様子だつた。帰りの列車は割合に混んでいたがどうかかすわれ予定帰京時刻より早く上野へ着いた。(吉田記)

今回の訓練では思わぬ事故を起こしOBの方々に大へんな迷惑をおかけしまして申し分けありませんでした。あの事故の原因としては ①不注意 ②疲労という二つの大きなことが考えられますが、どつちかと言えば①ではなかつたかと思ひます。この事故を深く反省し次回の雪上訓練へ臨むつもりです。また、OBのみなさんや、現役のみなさんに御見舞に来ていただき本当にありがとうございました。

(3) 5月山行 —— 雲取山

◎ 参加者 (O.L) 在間, (S.L) 荒木; 田口; 吉田, 西井, 田原, 鈴木; 阿部, 荒木達郎, 石川, 今井, 上村, 松田, 望月, (O.B) 平木氏

◎ コースタイム

6月7日 氷川15:10—鴨沢16:00—小袖17:10

6月8日 出発6:15—ブナ坂8:45—雲取山9:40~10:40—大クビ
レ12:55—日原14:40

鴨沢に着いた時は、いまにも泣き出しそうな空であつた。最初から、だらだらの厭な上りである。あと雲取まで何千メートルと書いてあるクイを見ながら登つて行つた。傾斜がいくらかなだらかになり出したあたりから小雨がパラつき始めた。そして小袖のキャンプ場に着くころには、かなり強く降つていた。テントを張つてすぐその中で夕食の準備を始

めた。1年にとつては初めての幕営である。ただでさえ憂鬱である幕営生活なのに雨が降っていたらなおさらである。1年のためにも晴れてくれたらと思いながら夕食のおでんを煮、出来上がる頃には小降りになり外で食事することができた。

翌朝、出発のときは曇っていた。くねくね曲つただらだらな上りを行くとやがて七ツ石の分岐である。道は昨日の雨ですべりやすかつたがさすが誰もころばなかつた。しばらく行くとブナ坂に着き、そこで荷物を置き、昼食を持って出発した。青空が見え始め、陽がさしていくらか暑くなつてきた。急な道を上りつめるとやがて前方に割合大きい雲取が見え始めた。最後のピークにかかりファイトをかけながらゆつくり上つて行つた。割合あつてなく頂上に出た。かなりバテたが1年は皆元気である。頂上にはたくさん人がいた。しかし天気はすばらしい。遠く南アや奥秩父の山々がはつきり見えた。風がいくらかあつたせいか、寒かつた。昼食を済ませ記念写真をとり、今来た道を駆け降りた。

ブナ坂でまたキスリングを背負い、七ツ石山を越え千本ツツジにさしかかつた。右側一面にツツジの花が、と言いたいところだが、ところどころにしか花は見られなかつた。巳ノ戸の大クビレから平らな長い道も終り巳ノ戸林道の急な下りになつた。さつきと違つて木々が生茂つたジメジメした暗い道である。全員快調。日原川を隔てて目の前に林道が見え、日原川を渡り西日原の停留所に着く。しかしバスが混んでいるので鐘乳洞まで行き長い行列に加わつてバスを待つた。2年はかなり疲れていたが1年はまつたく元気である。この山行は1年にとつて初めての山行であり、彼らが山とこのクラブの良さをどの様に理解したかわからないが、是非好感をもつようになつてほしい。2年の苦勞はたいへんだと痛感した。

(鈴木記)

(4) 6月山行 —— 丹沢主脈・主稜

◎ 参加者 (G.L) 在間, 永井; (S.L) 荒木, 鈴木, 西井, 吉田, 田原; 荒木達郎, 石川, 今井, 松田, 宮本; (O.B) 上遠野氏, 梅原氏

◎ コースタイム

6月28(晴) 渋沢一大倉 15:35 - 堀山 18:10 - 塔ヶ岳 20:05

6月29日(曇のち雨) 出発 6:00 - 蛭ヶ岳 8:45 - 金山谷乗越 11:50

- コウシン 14:15 - 玄倉 16:05

が降
を
石
く行
さ
しえ
つけ
か
せ
ト
巳
て
見
き
る。
理
と
達

バスで、大倉へ着いてすぐに塔ヶ岳を目ざして馬鹿尾根に行く。はじめはゆるやかだが、だんだん急になる。見た目には楽であるが、足が思いどおりあがらない。1年にはいいトレニングだ。ずんずんいく。夕暮れのせまつた表尾根に三ノ塔が見える。だんだんリッツがひらけてきて、みとおしがよくなる。と同時に道も急になる。ちよつとでも止まれば、ズルズルとすべりそうな感じだ。重荷と急坂のためか足がつる者が出る。途中の小屋で夕飯をとる。前方に花立ノ頭と塔ヶ岳が見える。半円球と三角形の対照的な組合わせだ。まともイヤな坂道を登りだす。とうとう足のつりのために列がとぎれて、2つに分かれる。ゆつくりゆつくり行くがつけこう高度をかせいで花立小屋に出る。ここで後の者を待つ。空にはもう月が出ている。左の方は雲が津波のようにうごめいていて何も見えない。あすの天候が気になる。正面の明るい所が塔ヶ岳だろう。後の者が追いついて、真暗な中で花立ノ頭を過ぎる。段々状の登りをくりかえして頂上につく。すぐに幕営する。暗くて手間どる。

朝飯の茶漬けをかきこんで、出発。天気は曇りだが南の雲界の中富士山がまぶしく秀麗さを誇っていた。1Pたつて竜ヶ馬場の斜面を過ぎると丹沢山に出た。四方が林に囲まれて展望はない。早戸川の下りで悪場に出る。岩が露出している。目の前に不動ノ峰が、立ちただかる。草原に囲まれた気持ちの良い斜面を進む。下から風が吹いて快適そのもの。しかし、空模様はだんだんおかしくなってくる。林で囲まれた頂上で休む。空カンがたくさんあつた。こんな所もハイキングコースかとガツカリ。

下りになつていよいよ丹沢主峰の蛭ヶ岳を目ざす。さほどの登りもないうちに頂上に着いてしまう。しかし、もうまわりは乳灰色のガスで何も見えない。せつかくがんばつたのとみんな頭にくる。頭にきすぎて腕立伏せをする馬鹿もでる。蛭の下りはものすごい。ものすごく急で、下にすいこまれそうだ。所々道がぐずれかけている。去年ここを登つたのが不思議なくらいだ。白ヶ岳の登りは、主稜特有のクマザサのせまい道である。展望はないし、道がぬかつていたのでいらいらする。何度もニセピークにだまされた後、やつと頂上らしくない白ヶ岳に出る。昼飯のフランスパンを食う。ガツガツやるうちにポツリポツリとくる。すぐに出発する。雨がひどくなつてポンチョを着る。金山谷乗越で予定変更して、ユージンに下る。右に檜洞丸40分の道標をうらめしく見おくる。倒木が多い為、パーティを2つに分けて行動する。所々花崗岩が露出していて、つるりとすべりそうだ。沢の音が聞こえてくると先発隊が川原にるのが見える。沢におりてびつくり。ちよつとの雨でこんなにも、増水するのか。全く荘烈という言葉しかない。人間を寄せつけない大

自然の非情さが、この沢の流れにはあつた。仕方なく徒歩する。ひさまである深さの中を、適当な足場を見つけて、飛び飛びに川を渡る。もちろんこけたらアウチである。こけた馬鹿が2年に2人ほどいた(すぐに起きあがつた)。靴の中はびつしよりなのに、こけてけつまでぬれてしまつた。のつべりした一枚岩があり、O.Bが一步一步、ホールドとスタンスを教えてくれる。所によつては、あまり深く、O.Bが岩を投げて足場をつくつたおつかない中に沢登りのスリルと爽快さを味わう。一ヶ所岩が露出した所があり、ハリ綱をザイル代りに使う。ここを過ぎると左岸のまき道に出て、一安心。しばらくゆくと、雨のため避難した登山者でつまつたコーシン休泊所に着く。一休みして、玄倉目指して雨の中を林道歩きである。全身雨に濡れながら、今山行のことを考える。檜洞丸まではいかなかつたが、雨の中を長時間歩き、また増水した沢を徒歩したことは、1年だけでなく2年生にも、ちよつとした気象条件で変わる山の状態そして山の恐しさを実感として知つたことは、全く有意義だと思つた。歩いても歩いても、果てのない林道をゆくうちに、ユージンから来たトラックが通り、乗り込んだ。

遠く、後にそびえたつ丹沢の山々を雨の飛びくる荷台の上で、見おくりながら、きつとまたこの山々に足跡を残してこようと、新しいファイトが湧いてくるのだつた。

(西井記)

(5) 夏山合宿 —— 薬師～檜・縦走

◎ 参加者 (C.L) 在間; (S.L) 荒木, 田口(7日上高地へ下山), 永井; 吉田, 西井, 鈴木; 荒木達郎, 松田, (O.B) 三浦等氏, 三浦潤氏, 山野氏, 岡田氏, 永井(兄)氏, 古西氏

昨年度の夏山は計画中途で下山する事になつてしまつた。絶対に挫折できない——これが今年我々に与えられた宿命でさえあつた。

コースに関しては4月より後立山・剣・裏銀等出ていたけれども、昨年なされなかつた縦走を完全に実行すること、そして確実性を重んずる事より、もつとも適当かつ今年のO.Bの合宿途上となる薬師岳～檜と決定。奥穂往復を加え、徳本峠を越える事にして準備を進めた。

なお、新入部員5名のうち、1名は家庭の特殊な事情から、また1名は6月山行にて足

く。急な下りを注意しつつ下り、雪溪を下れば幕営地に到着。天幕を張っている頃全員到着。全員下着等替える。これまでの雨のため石油を使い過ぎたため明日より少し切りつめる事にする。

◎ 8月3日(雨のち曇)

出発 7:20ー引き返し点7:40ー幕営地8:20

40分遅れて起床。目覚ましがおわれてしまった。天気が気になる。裏銀の方は晴れている。五郎のカーンもほぼ見渡せる。出発と決定して歩き出したが20分ほど行くと雨が降り出す。無難な策を取り、引き返して停滞とする。雨はしばらく降りじきにやんだが、差詰今日は休養日というところ。日中近くにある岩に登つたり、1年に裏銀方面の展望について教えたりした。

◎ 8月4日(晴のち雨)

出発 5:30ー三俣蓮華岳8:25~9:00ー双六池10:50

晴れ間が出ている。1Pで五郎小屋まで行く。青空が広がり久しぶりに感ずる明るさ。三蓮の登りが始まる。着実に行く。途中薬師が大きくその姿を見せた。樹林帯の急登を終えると、展望がひらけ休憩とする。裏銀・薬師・五色ヶ原……北方の展望は抜群。今回初めての大展望であつた。それから1Pで山頂着。双六の方からガスが迫つて来る感じがする。風が冷たくハイマツの中に入り昼食を食う。北の方にもう一度目を向けて双六へ向かう。ガスの中に入った。双六岳ではその真つただ中だ。池への下りは注意せねばならない。平らな広い洞原状の所はガスと厄介だ。方向を取り違えそうになる。その後ずつと下り雪溪をトラバースし、さらに下ればガスも晴れて来て、双六池に着く。風が強くテントが張りにくい。補強を頑丈にする。結構良い幕営地だつた。

これまでただ歩くというのみで、若干意気消沈気味の1年に明日は槍だと励ましを与える。

◎ 8月5日(雨)

停滞。ずつと雨が降り続いている。台風が上陸した模様。午前中は風雨ともに強く、テントから一歩も出られない。しかし次の通報で台風は熱低に変わったということで、夕方は雨も止み、台風一過の感であつた。

◎ 8月6日(ガスのち晴)

出発 4:30—千丈沢乗越7:20—滄の肩8:25~9:00—槍の穂先9:25
~9:45—槍沢小屋12:40—横尾14:40

まだ暗い中を歩き出す。縦沢へ登るにつれて明るくなるが、日がさしそうな気配は無い。またガスの中に行く。2Pで千丈沢乗越に着く。肩へ向かうが1年がひとり遅れ出す。だが皆天候のせいでかえつてバテる事なく山荘前に着いた。

震えて昼食をとっていると晴れ間が出て、大裕が姿を見せる。一同歓声を上げる。さあ早く行こう。ちよつとした岩場だが恐怖心がかなり大なる者がいる。ちよつと頭を出した穂高を見て穂先に着く。360°の展望という訳にはいかない。北鎌はやはり印象的。それほど景色を楽しめなかつたけれども下降開始。下でかん詰を食べて槍沢を下る。

1P下つたところの雪溪の脇で第二昼食とする。西井がこの下りで遅れてしまい、僕はこゝろでかすり傷を負つてしまうという醜態を演じた。空はずつかり晴れてきて、今回初めて雪のシャベットを食べた。やはり夏は暖いのに限る。一ノ俣で一休み、西井のバックを直させ横尾へ向かう。2持40分到着。O.Bの方7名と夕食を共にする。

◎ 8月7日(雨のち曇)

出発 5:35—濁沢7:40~13:50—幕营地15:20

今日は奥穂へ向かう日だ。No.17の準備が常に遅れがち。各人背にピッケルをさして出発。丸木橋の手前で雨が降り始めたがともかく濁沢までは行くことにする。

かの有名な濁沢に着き上を見上げるが穂高の頂上付近はずつとガスつている。小雨さえ降るといふさえない天気で小屋で雨の上がるのを待つ。結局、協議の結果、奥穂へは登らずに雪溪訓練を行なう事にする。1年が雪の上を歩くのに慣れるというのに主眼を置いた。1年生はキックステップの登降の練習、2年生は上へ行つて滑落停止の練習を行なつた。2時間半の練習の後、横尾へと帰る。途中ちよつと止まつて屏風岩を眺める。

明日は下山だ。途切れ途切れに歩いて来たという感じが強い。今となつては結構短かつたような気がする。残つたものを殆んど食いつくし、明日の鋭気を養う。

◎ 8月8日(雨のち晴)

出発 5:45—徳本峠9:10—巖留小屋11:00—島々14:40

目覚めると雨が降っている。何が何でも出発だ。どしや降りの雨の中をやや増水してい

る梓川を見つつ行くが、徳本の登りにかかる頃には雨も上がりはじめ太陽も木陰から垣間
見ることもできるようになった。目前に見える稜線目ざしてひたすら登るが、容易に近づ
かない。峠の手前で雨が止んで晴れ間が出てくる。最後の登りを頑張つて9時峠着。残念な
がら穂高は見えない。カルピスを飲む。

あとは下りだけだ。峠のひなびた茶店を後にずんずん下る。1時間で 鯨留小屋の沢で昼
食とする。そこから安定の悪い奴がいて木橋の上でコケたりするが1Pでトラック道に出
る。暑くなつた道を担々と歩くが、鈴木 of 足どりがふらつくようになつたので、一休み入
れて水を飲ませると後は難なく歩く。結構長いバス道路を歩んでやがて無事島々沢に着く。上
遠野・川田さんからスイカを頂く。スイカを食いつつ、また電車の中で安らく時まず安堵が、
そして各個人の内部にめいめいの思いが広がり始めた。 (荒木記)

1969年 女子

(1) 6月山行 —— 鍋割山

◎ 参加者 (C.L)吉沢, (S.L)甲斐, 東郷, 田辺, 広兼, 渡辺, (O.G)佐
久間さん, 高木さん, 岩井さん, (O.B)目沢氏

◎ コースタイム

6月21日(曇のち晴)ー渋沢14:30~14:45ー二俣16:35

6月22日(雨のち曇)

出発7:00ー後沢乗越8:05~8:20、山頂9:15~11:05、後沢
乗越11:32~11:45ー渋沢15:55

みんなで慣れない(?)「ハヤベン」をして土曜日の午後盛大な見送りをうけて、学校
を出発。今回は出発前日になり1年生2人が不参加になりそのうちの1人が退部というシ
ョックなことがあつたが、ともかく全員元気のようにだ。渋沢に着いた頃には今にも降りそ
うないやな天気。大倉から歩きはじめる。1Pを歩いた頃から、とうとう雨が降り始めて
しまつた。みんな雨具をつけて歩く。でも調子よく進み2Pで二俣着。暮営し食事の仕度
に取りかかつた頃、岩井さんがいらした。夕食は量が少な目。食後差し入れのクッキーと
ピワを食べて明日の天気を心配しながら就寝。1年はなかなか眠れなかつたようだが、2
年は非常によく眠れて、11時頃「起床!」と声を上げた人もいた。

4時、今度は本当に起床、起きてみると雨がしとしと。少し様子を見て出発。比較的平

らな道を40分位歩いて水が流れている所で休憩。すべりやすい急な道を登る。さすがに久しぶりの24kgは身にこたえる。しばらく歩いて明るくなってきたとほつとしたたん、すべつてころんでしまった。さつきの休憩から20分程で後沢乗越。非常に調子がいい。ザックをおいて空身で鍋割山へ。背中が軽い。今にもふわふわと飛んでいきそうを感じ。登つていつて「もう頂上かな?」と思うとまた登り道。いひかげん頭にきた頃、山頂着。出発は1時間遅れたが、山頂に着いたのはコースタイムよりずつと早い。目沢さんと佐久間さんの作つてくださったレモンサンドと差し入れのサクランボを食べる。のんびり紅茶を作つたりなどして山頂に2時間近くいた。30分足らずで後沢乗越。またザックをしようつて、やぶだらけの歩きにくい道をゆつくりと登つていく。少しいくと平らな道になり、いよいよ下り。今にもすべりそうなところも数カ所ある。でも日は照つてないし涼しいのでガンガン歩く。3Pでバス道に出た。いやなバス道を1時間半位歩いて後沢着。予定より2時間近く早い。コースタイムより、早いのは実に気持ちがいい。今回の山行は本当に楽しかつた。しかし、コースの選び方(バス道を1時間半も歩いた時間のロス)やコースタイムの立て方など計画段階から2年には、考えることがたくさん残された。(東郷記)

(2) 夏山合宿 —— 白馬岳

女子にとって最大の目標である夏山合宿の目的地として、朝日連峰、妙高等を考えたがO.B、O.Gの方の意見を伺い、白馬一雪倉、朝日縦走とした。白馬岳は過去2回やつているため、少しでも違うコースをと、北小谷から風吹大池のコースを取つた。1週間の準備を終え、1年22kg、2年27kgとなる。

◎ 参加者 (O.L)佐久間さん、(S.L)甲斐、東郷、田辺、広兼、渡辺
(O.G)高木さん、中井さん、(O.B)梶内氏

◎ 8月7日

新宿駅に着くだけで汗びつしより。O.Gの山田さんが急に行かれなくなり、現役5人、O.G3人、O.B1人の計9人となる。15人程に見送られ発車。車内は冷房がききすぎて寒く、眠ろうと思つてもなかなか眠れない。

◎ 8月8日(曇)

—北小谷7:03~7:55, 小屋の中間地点8:51~9:10, 造林小屋9:57
昼食12:05~13:42, 風吹大池15:30

目を覚ますと小雨が降っていた。北小谷駅はいかにも田舎の駅らしく人気がない。降りた乗客11人。ここでポリタンに水を入れる。ライトバンを2台頼んでおいたのに1台しか来ず、2回に分けて乗る。予定の場所まで入れず時間をロス。出だしからよくない。降つたりやんだりの天気。道は泥沼のようでズブズブと埋まり、脚を持ち上げるのに一苦労。3Pで一生懸命歩いているのになんとなく遅れる。パテたのかと焦るとバランスも崩れ呼吸も苦しくなる。次からは自分のペースで行こうと割り切つたら楽になつた。4P目に少し開けた所で昼食。ドッグパンがなかなか呑込めない。再び歩き出す。道は相変らずで滑つたり転んだり。ズボンが泥だらけ。まだかまだかと思いながら単調な道を歩く。林が切れ野原の向こうに湖の一部が見えた。疲れが消し飛んだ。ごみはあるが人は誰も居ない。夕食はスパゲティミートソース。梶内さんが大事に持つて来た卵を各自の好みに合わせて焼いたりいつたりして食べる。食後のプリンスメロンがおいしかつた事。風が強くてテントの入り口をいつも閉めておかねばならず面倒くさい。夜中雨の音で目を覚ます。

◎ 8月9日(雨のち曇のち雨)

出発9:10—昼食12:35~13:30, 天狗原14:45~15:00,
白馬大池18:42

朝食をすませたが雨が強い為、小降りになるのを待つ。9時過ぎ出発。小雨の中をポンチョを着て歩く。道の所々に水が溜る。腰までつかりそうなので脇の藪を遭ぐ。3Pで昼食。じつとしていると寒い。次のピッチで天狗原まで。ここから岩だらけの急な登りにかかる。振り返ると下に天狗原が見える。緑の中に水溜まりがあちらこちら。小さな雪溪を登ると乗鞍の頂上。強風と横なぐりの雨。白馬大池が眼下に広がり対岸に赤い屋根の小屋がある。小屋は見えてもなかなか着かない。実に長い時間であつた。小屋で人がフアイトと叫んでいるのが聞える。6時半過ぎだ。夕食を作りながら熱いココアとワッフルを食べ元気を取りもどす。04の方が野菜サラダを作つて下さつた。着替えをして寝る。次の日は充分休養をとる為停滞とする。

◎ 8月10日(小雨のち晴)

4時頃起きてみると腰のまわりがビシヨビシヨ。防水のシュラフがあれ程濡れるとは思わなかった。キスリングによりかかり坐つた格好で8時まで眠る。のんびり朝食を作り後始末をすると昼食の時間である。この日は食事を作るので終つた。

◎ 8月11日(雨)

朝食を作つていると突然テントに水が流れ込んで来た。隣りのテントに移り、テントに身体が触れないようにと窮屈な姿勢で食べる。結局この日も停滞。トランプをやる。婆抜きと七並らべぐらいしか知らない1年にセブンプリッジ、ナポレオンを教え込む。1台のラジウスを囲んでみんな寒そう。セーター2枚の上にヤツケまで着ている。特にズボンが濡れている。テントの中でも吐く息が白い。グランドビニールが濡れている為、坐る場所に苦勞する。風が吹いているのでテントの空間が狭い。2日間もずっと前屈みになつているため腰が痛い。濡れたシュラフにもぐるとぞつとした。脚にポンチヨをまいて眠るが効果なし。1時間おきに目が覚める。乾いた蒲団に寝ている夢を見た。

◎ 8月12日(晴)

出発6:22-三国境8:12-山頂8:45~9:08-三国境9:35~
10:50-白馬大池

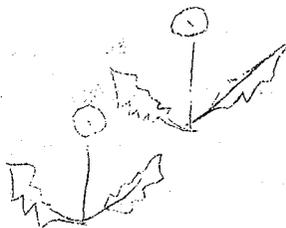
計画を変更して今日白馬往復明日下山とする。雨があがつている。空身なのでピュンピュン飛ばす。大きな虹が3本。虹を見たのは何年ぶりだろう。大日岳で小休止。ここで大池で隣りにテントを張つて私達より早く出発したパーティに追いつく。皆、短パンに半袖のシャツといういでたち。こつちはヤツケを着ているというのに。ガスつても見えない。頂上には1人もいない。寒いので写真をとると少し下り岩かげで休憩。下を見ると雲海。上を見ると青空。三国境まで下り昼食。後は大池に下るだけ。花の名前をO.Gにおそわつたり雷鳥をみたり。途中雪溪の傍で休む。晴れて来た。大池を見下ろす所まで来ると、小屋の横に灰色のテントが2張。我々のである。大池に雲の影が映つて流れて行く。テントにもどるとすぐテントをとつ払い、濡れた物を乾かす。他に誰もいないのでそこら一面我物顔に広げる。後から来たパーティが狭い場所に張るはめになつた。テントが乾くと別の場所に張りなおし夕食の用意。最後の晩は五目寿司。ラジウスの調子が悪く遅れる。かたづけの後、歌と花火。風が強クマツチの火がすぐ消える為、メタを燃やす。空は星だらけ。

流れ星を見た。真昼打ち上げた5連発花火が風に流れて美しい。シュラフが乾いてよく眠れ
そうだ。

◎ 8月13日(快晴)

出発6:15-天狗原9:02~9:12-昼食10:45~11:45-神の田
圃12:30-御殿場小屋13:37~14:20-白馬大池尻17:50

乗鞍まで1P。2年のバックが悪いと直していただく。晴れて暑くなってきた。手がむ
くみ握りしめると痛い。4日前登った道を下る。天狗原から栂池へ。成城大小屋近くの河
原で最後の昼食。水が冷たい。空はまっ青。東京では見られない色だ。今まで使う機会がな
かったサングラスをかける。神の田圃を通り御殿場小屋へ。冬スキーで滑った道を歩く。
小屋でお茶を御馳走になり、今年の冬もよろしくと挨拶する。ジープが通つたので荷物を
親の原まで運んでもらう。荷がないのでバカ速い。近道を下る。遙か遠くに白壁の家が点
在している。2時間程で親の原着。荷物を背負って出発。駅まで最後の1P。気はあせる
が遅い。皆疲れてるようだ。銀色の屋浪が見えた時はほつとした。松本に向かう途中とう
とう終つたと感じた。長くはなかつた。家に帰れるのが一番嬉しい。この山行では2年の
役目が充分果たせたとはいえない。O.B.O.Gの方に何もかも御世話して頂きありが
とうございました。(甲斐記)



Ⅲ クラブ存続問題の総括

(1) 資 料

① 経過報告 (1968年～69年)

11. 18 春山偵察山行の計画書を顧問に提出。
春山合宿の形式と意義の説明不足の為か山行許可出ず。
11. 20 顧問側から、教育庁通達と、顧問の知人の某氏の意見により、この計画は
高校生の域を越えるというので中止を勧告される。
11. 21 現役はO・Bの許可のもとに、確信をもつて再度交渉にあたり、とりあえ
ず偵察だけはやってみるということで、顧問の山行許可を得る。
- 11.22～24 春山偵察山行を実施。
- 12月 } 春山の具体的準備(行動表・食糧計算・器具計算・etc.)。
1月前半 } 情報収集にあたる。
1. 21 顧問・O・B・現役 3者の話し合いで、顧問側から具体的な年間の山行
縮少プランが出される。
1. 28 リーダーの木俣は、このような規制の中での山行を続けていく気がしない事
などを理由に退部。
2. 12 木俣退部により2年生の力量を考慮し、春山合宿を仙丈から、八が岳へ変
更、今度の計画は顧問も許可。
2. 21 顧問側は山行の程度を下げ回数を減らさない限り休部の措置をとると示唆。
2. 26 同じくクラブ存続の可能性は、我がクラブが"ワンゲルらしいワンゲル"
になることだと示唆。
3. 20 生徒指導部長(当時兼顧問)、生徒会長に我がクラブの休部を示唆。
3. 22 O・B諸氏、本格的にクラブ存続の為、顧問と話し合います。
- 3.25～31 春山合宿を実施。
4. 11 新年度、顧問未決定ということで1年生へのクラブ紹介を阻止される。そ
の後、実質的な活動停止を宣告される。
4. 16 職員会議の"新しいワンゲル"になればつぶさないという決定をきく。
4. 24 田中氏来校し、増田先生と取り決めをし、クラブ存続問題に一応の決着を

つける。

4. 30 顧問決定。メンバーは以前とかなり異なる。
5. 2 新制度で活動がやつと解禁される。
5. 31 顧問から部員の保護者へダイレクト・メールがでる。公式山行以外はクラブ活動でないとの内容。

② 新制度

<公式山行>

健康な西高生ならば誰でも参加できるようにという基本方針のもとに行なり正規のクラブ活動。山行の都度、参加者を募集し（一般部員と呼ぶ）、顧問教官とO・Bが同行の上指導にあたり、後述の研究部員からも数名派遣する。一般部員には、トレーニング、研究活動は課せられず、ただ山行に応募するだけでよい。山行はすべて男女合同ではぼ下記の程度で行なり。

4 月 奥多摩方面（日帰り）

5 月 ”

6 月 ”

夏 山 上高地・八ヶ岳・奥秩父方面（キャンプを主として 2泊3日）

9 月 丹沢・奥多摩方面（日帰り or 1泊2日）

<研究班>

公式山行では満足できない者の為に、正しい登山の方法を指導する目的で、学校がO・Bに指導を全面的に委託する。部員は研究部員と称してトレーニング、研究活動を充分ふまえた上で山行に参加する。活動は従来のワンゲル部の公式山行を継承し、さらに発展した形で行なり。男女の行動は別とする。

③ 解説

西高山岳部～ワンゲル部の歴史の中で今回ほどクラブの存在自体が問いつめられ、極めて窮迫した状態に置かれたことはなかつたであろう。昨年（1968年）11月、春山合

宿の仙丈岳地蔵尾根の計画を提出した頃から、クラブ運営に関して顧問と我々との間の意見の相違が表面化した。顧問側はそれまでのO・Bに実際的な指導をほぼ一任するといった状態（石井先生が顧問の時に決定）では、指導の目が行き届かなくて生徒が何をやるかわからないし、山行を教師が指導できる（ついていける）程度にしなければ、クラブ活動として認められないとの意見である。そこで顧問側は山行縮少プランを漸次出していき、はじめは積雪期の山行を中止、次は夏山を、4日にする……と我々が考えもしなかつたプランを出しはじめたのだつた。特にその中で強調されたのは「ワンゲルらしいワンゲル」というわかるようでわからない言葉だつた。つまり、山登りにはもつと楽に登り方もあるのだとさとし、又一方では我々の活動は活発すぎるから規制せよ、もし従わなければ休部にでもするぞというおどかしである。この考え方は顧問の間で一貫していた。そしてその現われとして「新しいワンゲル」（つまり教師の不満は解消できるような）になればつぶさないという職員会議決定であろう。ともかく、こうして「新しいワンゲル」が新年度もかなり経過してから、資料③にあるように定まつたが、それとて問題を本質的に解決したとは言い難い。

(2) 公式山行について

本年度より新たな性格を持つ公式山行として次のようなものが行なわれた。

5月3日 新入生歓迎会、川苔山（日帰り）

6月1日 御前山（日帰り）

小河内ダム — 御前山 — 境

8月24日～26日 金峯山・瑞牆山（2泊3日）

1日目 増富— 瑞牆山荘

2日目 瑞牆山荘 — 富士見平—金峰往復

3日目 瑞牆山往復 — 増富

註）新入生歓迎会は研究部員の山行としてやり、なおかつ顧問が同行。

山行内容をどく大きづばに書こう。6月の山行では初めて山行に加わつた1年生の女子が、照りつける天気であつたがわずか1時間半ほど歩いただけでまいつてしまい、鋸尾根を下る予定であつたが、変更して早く下りるといふ結果であつた。本人の健康状況・体力等知るよしもなかつた。8月の山行は、女子が暑さにバテて予定していた富士見平まで入

れないという事が起こつたが、あとは予定通り行なう事ができた。天候に制され金峯、瑞牆からの展望は満喫でき、特に技術修得を目的としない公式山行という事から考えれば、非常にうまくいった。

このように公式山行を行なつてきたわけであるが、これについて問題を提起せねばならない。むろんこういう制度になりつつあつたときに、このような山行を行なう事に反対だというのは全部員の一致した意見であつた。

まず第1に参加者がいないという事があげられる。積極的参加希望というのは皆無の状況である。生徒への広報として6月には、ポスターを4枚ほど校内に掲示して参加者を募集した。8月の山行の方は、7月中に1年生全員と2年の一部にプリントを配布した。しかしながら参加希望を申し出てきたものはどちらも、ほとんどいなかつた。結局1年生を個別に勧誘し、どうにか人数を集めた。さらに8月の山行では一般部員については8名参加という確約を取つたが、準備会までには、参加という者が3名となつてしまつた。まさに浮動の状態であつた。

最初にこのような山行を行なうと決まつたときに、我々が感じたのは「奉仕」ということであつた。しかしながらいくら奉仕と言つても、参加者がいない山行を行なう必要があるのかという疑問がつきまとう。

さて、一見矛盾するかのように見える点がある。公式山行の参加者を苦心して見つけている裏に、部には一応、研究部員と称せられる者が、存在しているのである。それでパーティーを構成すれば公式山行等は成り立たせる事ができる。だが、夏山を春山をみざす者が、男女一緒の、日帰りのそんな山行で時間をつぶしてられるだろうか。あえて全員でそれをも行なおうとするなら負担は大となり、そのみを取るなら質的低下をまねくだけだ。

もう一つ。教師は「公式」と言うがそれも今のところ「山行」なのである。相手は山で、その人間がどのような体力や心身の状況を持つのかを知らぬ引率者が、まるで下地の無い者をも連れて行くことになるのである。

ところで、公式山行に何かの意味を見い出そうとするなら、比較的軽い山行をやる事によつて、教師をして、我が部のファンにできるのではないかというようなささやかな憶測がある事である。

結局、我々はこのような山行形式を快しと思つている訳ではない。極言すれば、単に学校の体裁づくりとも言えるようなものである。ここでは問題を提起する事によつて終える

が、現在のそして今後の我部の有り方、高校の中の山岳部という宿命の中で、どのようにして自らの欲する山行を行なっていくか、方向性を持つて真剣に考えていかねばならない。

(3) 論 説

現代高校登山論

在 間 直 樹

現代はまさに "断絶の時代" なのか? 一つの明確な志向性がある時突然に阻害されると、"理解" や "協調" といった類の語は欺瞞の象徴として浮かび上がる。老人 \leftrightarrow 若者、管理者 \leftrightarrow 被管理者、傍観者 \leftrightarrow 行動の主体……と断絶は深い。常に超然としているのは自然だけなのか。

山岳部は規制される

現代の高校山岳部は我がクラブの存続問題(資料参照)で端的に現われたように様々な問題をかかえ、苦悩している状態である。

高校生の中にはたとえ少数であつたにしてもひたむきに山へ自らのパトスを燃やし続け、団結してどんな苦痛にも立ち向かい、未知なる自然を探求するといった "パイオニア・スピリット" を持つている者は常にいるものである。しかし、それとは裏腹に、教師の指導力不足、あるいは文部省、教育庁の官僚的事なかれ主義的発想の通達等を理由にしばしば高校生の登山は制限されているのが現実である。だが、これらの高校生の登山規制は妥当なものと言えるだろうか。オトナの使い古された理屈でもつていくら規制してみたところで、山に魅了された高校生のパトスを抹殺することはできないばかりか、かえつて誤つた方向へ持つていきはしまいか。ザル規制は指導不足から無知な登山ひいては遭難の多発を招いているとも言える。

又、規制の為か、高校の中には山岳部という名称をつけず、あるいはつけられず、ワンダーフォーゲル、ハイキングなどといった名称をつけているところもある。しかし、これは必ずしも生徒が登山活動を先鋭的にやつてないということではなく、単に名称がそうなつてにすぎないのであつて、登山に限りない志向性を持続していることには変わりはない。

昨年秋、我々は春山合宿に新しい試みとして、極地法を模して1つの大きな山(仙丈岳)

をアタックするという計画を立てた。この計画に対して我々はO・Bのアドヴァイス、偵察の結果、種々の情報収集などをもとに検討し危険はなく我々の実力で十分やれるものと判断し、計画を進めた。それに対して顧問側は高校生の範囲（教育庁通達）を越える危険なものとして一切認めようとしなかつた。しかし、山行の危険でない範囲、安全限界というものは、個々のパーティの実力、バックボーンなどによつて決定するものであつて、画一的に高校生はここまで式の規制は意味をもたない。今さら時代遅れの通達がどれだけ現状に則しているであろうか。

なぜ高校山岳部の活動は規制されねばならないのか？ この問題を我がクラブの経験をふまえて社会的な状況から若干の解明を試み、将来の指針としたい。

求む 指導者 待遇悪し

山岳部に優秀な指導者が必要なことは言うまでもない。我がクラブの場合、かつては顧問教師も若くすべての山行に同行したそうだが最近では思うにまかせず、顧問の指導の限界が表面化してきた。そこでは完全にO・B会である西朋登高会の指導で活動して数年間順調にいつていた。ところが、このようなクラブ運営に対して顧問側からクラブ活動はすべて教師の指導下におかれなければならないという教育庁通達により、教師が指導できる範囲の山行にしたい。即ち山行の大幅なレベルダウンないしはクラブの体質転換との主張が出されてきたのである。顧問の言い分は——生徒を責任をもつて引率していただくの実力は備えていないが、事故等があれば当然、各方面からの追及の矢面に立ち、ひいては責任問題へと発展する。しかもわずかばかりの手当てで休日勤務までさせられるのは教育労働者である教師の過剰労働である。それに山行にも同行せず、あるのは責任のみというのではあまりにひどいではないか。とうてい面倒をみきれない——ざつとこんなものである。顧問のおかれているこのような境遇を憂慮し、かりに百歩譲つたとしても、顧問の恣意によつてクラブ活動全体が左右され、実力、伝統、部員の主体といったものがいとも容易に抹殺されうるといつた、本来、生徒の自主性を重んずるクラブ活動にとつてこのような悲劇的な状況は許しがたい。

クラブ活動とは何か

そこで考えられるのは、教師以外の指導者に学校が委託するという方法である。我がクラブの場合は従来我々の指導を目的の1つとした西朋登高会（O・B組織）が学校から指導を委託され、顧問制による悲劇はかなり軽減されていた。しかし、それとて、春山合宿

の際、露呈されたようにO・Bの指導できる範囲も顧問の強い統制ではなはだ不明確であることがわかった。そしてクラブ存続問題は結局O・B諸氏の献心的努力によつて、收拾された訳だが、クラブ活動についての本質的な問い返しを回避した形でしか折りあひがつかなかつたようだ。そのため、我々にとつて不本意と思われる面がいくつもあることは否めない。新制度によると、〈一般部員〉〈研究部員〉という分類があるが、そもそも山の登り方には1つしかないはずである。それは大自然がすべての人々にとつて同様に厳しいことに起因する。我々は〈一部部員〉のような登山を是認できないし、これでは実際に登山の指導をしたことにはならない。(実例をあげての批判は別記)〈研究部員〉の方はいささか待遇が悪い。顧問側はこれをあくまでもクラブ活動とは認めがらない。研究部員の山行の広報活動を制限したり、ダイレクトメールによつて保護者へ正式なクラブ活動ではないから学校はまるつきりソツポを向くと言つてみたりして、ママ子扱いされているのが現状である。我々はこのような扱われ方を不当に思う。クラブ活動はこのように規則(通達)によつて規定されるのではなく、活動の存在如何によつて規定されるべきではないか。我々は現に活動の主体として存在しているのであつて、まさに我々こそクラブ活動そのものなのである。すみやかにクラブの復権を望む。又さらに、どのような形でさるべき指導者に委託されるかという問題も解決されねばならない。

歪められた自主活動

現在の高校には山岳部に限らず大きな問題が山積している。そして教師も生徒も高校生活の充実していないことを嘆くが、その不満を自ら行動的に解決している者は少ない。現代社会が一見平和に自由にそしてすべての人々にささやかなる幸福感を与えるまでに生長(頹廢)し、若者でさえ自分からは何も求めず、いわば没主体的になるべく他人と同じ顔をしようやつきになつている者もある。このような中で生徒の自主活動は少ないながらもそのヴァイタリティをとどめている。

教師はというと、彼等の規範であるところの文部省、教育庁の定めたカリキュラム、通達などの消化に奔走している。そして、結果的には生徒を理解することも、生徒と協調することもできずに意図的ではないにしろ(?)生徒の要望を官僚の如く規範と対比させ既成のパターンを逸脱するものであるならば規制あるのみといった状況を生み出している。その際、教師の口からは必ず"責任"という語が強張される。しかし誰に対して責任を負つているかといえば生徒にでも保護者にでもなく、実は彼等の管理者である者、即ち校長、教育庁、文部省に対して責任を負つているのである。それにはまさに教育する官僚→教官

の姿しか見ることはできない。教師は規範の遵守実行の義務がある、一方で規範の範囲を逸脱する生徒の自主活動がある、ゆえにそれらの活動を規制する、といった単純な三段論法がまことしやかに語られる。ところがそこには生徒の活動をどのように生かし発展させていくかといった観点、つまり学校とは生徒のためにあるといった考え方はまるで欠落しているのである。教師は教官ではなく教育者として生徒に対して責任を負う必要があるのではないか。

個性を埋没させ画一化を図りおとなしい生徒を作り上げている現代高校体育の中にあつて、生徒の自主活動は極めて否定的状況に置かれている。山岳部活動はこれらの要因にさらに一般の人々の登山への無理解が重なつて、複雑に問題がからみあつているのである。

現代登山よ どこへ行く

現代とは皮肉なものである。いまや爆発的な登山人口の増加が取沙汰されているにもかかわらず、一方では高校山岳部の活動が規制されている……………

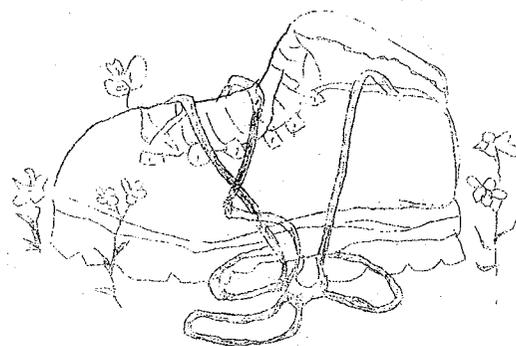
現代は情報社会と云われありとあらゆる情報の氾濫をみている。登山に関しても例外でない。大衆は山の美しさ、楽しさ、カッコよさの羅列にあつて、山へ山へとかり立てられる。ところが、大衆は現代の巨大なメカニズムの中で常に疎外感に満ちた無気力な生活、軌道に乗りパターン化した生活をしている大衆である。彼等は主体性に欠け刹那的情緒にのみ支えられ、それでいて単純な合理性は兼ね備えている。従つて、彼等は決して自ら困難を求めようとはせず、他人に規定されたおりの山行しかしないし、又できない。商業資本はこのような大衆を対象に商品として情報を提供する。例えば、ガイドブックはこれさえ読めば全てがわかる式に登山の紹介をするが、登山の困難性などはどこにも触れられず、自然のほんの一部を大衆に迎合するように紹介して大衆の山行を規定している。

このような現代大衆登山はその性格からいつて、ひとたび自然の苛酷な状態にあえば遭難を誘発しやすい。もちろん、過去の遭難の中には回避しえなかつたものも確かに存在するだろうが、種々の遭難記録などをみると、その多くは未然に防ぎえるものではなかつたか。登山は危険なものであるとよく言われる。しかしそれは絶対的な意味での危険ではなく、自ら克服する努力をしないため生ずる相対的な意味での危険である。即ち、山を研究し、いかなる困難な状況に対応できる実力を養うならば、登山の危険性をただただ怖れている必要はなくなるのである。現代大衆登山の危険はこのようにして解決しうるものである。

現在、最もなされるべきはやはり適切な指導ということに尽きる。ヨーロッパ・アルプスでは山の町に登山学校が定期的に開設され老若男女誰でも氷河上のアイゼン歩行、岩登りなどの訓練を受けることができるという。翻つて日本に目を転ずるならば、このような施設は皆無に近い。だから、高校山岳部は高校生にとつて唯一のそして最高の指導機関たかねばならないのである。現代大衆登山の危険を克服する努力は特に登山の基礎段階である高校山岳部において最も必要なことではないか。こう考えていくとますます高校山岳部の重要性をひしひしと感ずるのである。

自己の登山に認識を

現代登山はかつての登山のように純粹素朴な山への憧憬だけではなく、様々の社会的拘束のもとでしか存在しえない。その中で、自分1人だけこの繁雑さから逃がれようとしても社会生活をしている限り不可能に近い。であるならば、自らそれらを積極的に克服し、与えられた未来ではなく、獲得した未来の中で活動するしか我々の生きる道はない。後輩諸君よ、現代における登山の意味を深く考え、他人から規定されたものではない、自らの登山をたくましく創造する任の手として、一生けんめい山に登つてほしい。



Ⅳ 寄稿集

山での死を感傷的回想に終わらせない為に

在 間 直 樹

福田さんの遭難の知らせを受けたのは私が木俣と後立山の縦走計画について論じていた時だった。彼が遭難まさか……、その時まず脳裡に浮かんだのはいつものようにモナリザの亭主のような微笑をたたえながら"やあ、すまん、すまん"と頭を掻きながら帰ってくる福田さんであつた。又、同時に全身の神経が鋭くビリビリと造反運動を起こしているのがよくわかつた。それは今度も後立山の稜線に立ちたいという(実はその翌日出発することになっていた)個人的な体験への願望を上空でかつさらわれた事への口惜しさはあつたが、私の心のもつとでかいものが傷ついたように感じたからである。

捜索隊が発見し、みんなと一緒に心配することしか用がなくなつた私は、ふと過去の山行記録に福田さんを捜した。昨年秋、春山偵察山行で仙丈へ行つた時、ちょうど会社の山岳部で甲斐駒・仙丈へ行くことになつていた彼と、仙丈の山頂で待ち合わせることにしていた。私達は長大な地蔵屋根から登つたので当然先を越されているだろうと思つていたが、北沢峠から登つてきたいくつかのパーティを眺め回しても姿を見ることができなかつた。後日、私は"やあ、このあいだはすまん、すまん"と彼のズツコケ談をきいた。あの前日、甲斐駒を登つたのだが、下りで道に迷いビツアークし、翌日時に下つてしばらく休んでから午後になつて仙丈に登つたとのこと。ついでに福田さんの新人だつた頃の回想をきいた。本人の話だからいささか大げさなところもあるだろうがかえつてわさびがきいているようで面白い。山行ではほとんどヒロンヒロンにばててどうしようもなくなかなか準部員になれなかつたそうだ。そういえば当時のノートにはしばしば"フクダがノビタヒツクリカエツタ"などと書いてある。一度は野原さんに退部勧告さえ受けたという。それでも3年間やり通し、西朋に入つても活躍した福田さんは今の部員に欠けている何か強いものを持つていたような気がする。

1週間後、捜索隊は何も発見できぬまま"絶望"という知らせをたずさえて帰つてきた。私をはじめて接した山での死だつた。

ワ ン ゲ ル に 時 を す ご し て

田 口 真 啓

ワングル部に入部して早くも2年半を過ごした。その間ずいぶんいろいろな事があつたが、最も印象深く思い出されるのは1年生の時で、特に夏山春山である。すばらしく晴れあがつた夏の日、槍の穂先に立つて、さえぎるものもないあのすばらしき眺めに圧倒された事。鳥々についた時の何ともいえない感激、また春の奥秩父では、重荷に負けて何度もどうしてこんなに苦しまねばならないのかと思つた事など思い出せば限りがないほどだ。これらは貴重な青春の思い出として生涯僕の心に残るだろう。

2年となり新人を指導していく立場に立ち、僕は直接タッチしなかつたが、顧問との計画についての話など、山に登る事以外の要素がはいつてきて、前のように無心にあるいは煩わしさを感じる事なく山へ向かうことができなくなつた。特にそれを感じたのは夏山、春山偵察、春山計画に際してであつたが、それについて書くのは止めにしよう。ともかく山に行つて汗を流せば、そんな煩わしさは吹き飛び、山の良さを楽しむ事ができた。

僕にとってこのクラブは無味乾燥な高校生活に充実した時を与えてくれた。部室にたのしく時をすごし、あるいはパーティを組んで山に行く仲間を得る事ができた。

スポーツ登山を行なうクラブ員として

荒木仁夫

山に登るといふには、さまざまな形態・目的がある。人が山に登れば、その感性により感ずる事も多様であろう。山に求めるものも変わっている。山にて見る自然の美の感激。鳥の声を聞き、植物を見るところのような自然に浸る喜び。そういうものを求める者がいる。また山に登る事の困難さ、それに挑もうとする人間がいる。白雪をまとつた高山、岩の壁を登り、その困難を克服することを喜びとする。正当に挑むのが勝利への道であり、頂上に達するという事よりもその達し方が問題とされる。

欧州の山登り＝アルピニズムと日本の山登りには自ら相違がある。雪と岩をかかえた大アルプスを舞台として、頂上に立とうとすること、それは技術を持つ事と直結する。そして技術は不可欠であり、そんな中でスポーツ登山が繰り広げられてきた。

日本の山ではどうだろうか。それは春夏秋冬と季節があり、地形的にも比較的容易性を持つている。季節とコースの選択により、かなりの高度を有する山岳へ登るのが可能である。山に行き何らの主体性も持たずに頂上に立とうとするものがあり、道が整えられ、指導標は至るところにあり、山小屋はサービスを供給し、それを助けている。また一方に、そのような安易さを排除し困難なるルートを開拓している岳人がある。我国で山に登るといふ行為には、このような二面性があるものと思われる。

我々の活動を考えよう。私は我がクラブがスポーツ登山を行なうものとしている。実際には、それを行なう前段階としての登山をしている。現在の部員において最も問題となるのは、はつきりした目的意識に欠けるという事である。そして活動の方針が定かでないと言われる。然りである。結果として、それが部員の思考力を低下させ、山行に対する意識を薄めている。

前記の二面性は、我部において双方とも関与している。我々はスポーツとしての登山を旨とするのだけれども、特に無雪期においては、安易なる登山が行なわれる対象と同じものを環境として山行を行なっているというのは否定できない。その中では体力の養成を行なってきたが、それはまさに可能であつた。

さて、登山の目的は、その対象を克服せんとすることにあると私は考える。だから訓練はその目的を達成するのに必要なことを身に着けようとするのであり、何かを習得するために目的がつけられるのではないと考える。アルピニズムの基本的なことだろう。

現状はどうだろうか。社会はことごとく、基礎的な技術の習得をするのみを高校生として分相応としている。それについて根拠はある。高校在学中という短期間の経験の応用しかできぬということ。そういう段階で高度の山行を旨とするのは無理なしとは言えない。

しかし、私はかく提言したい。自分で登高欲の持てる具体的目標を持って。スポーツ登山を行なうという事を確固たるものとするためである。特に春山において。名実ともに最終目的としよう。すべての必需性はそれを目標として自分に加えていかねばならぬ。

ウインパーがマッターホルンに挑んだように「絶対登る」という決意こそ、我々の登山の第1歩である。

2年になつて

東郷頼子

私がワングルに入つたのは、別に入りたいクラブもなかつたし、熱心に勧誘されたのはワングルだけだつたからだ。それに母に相談したら、「ワングルならいいんじゃない」といわれたせいもある。このような気楽な気持ちで入部したが、入つてみると意外や意外、ともかく苦しくて苦しくて何だかめよふと思つたか、何度泣いたかももう数えきれない程だ。でも11月の大菩薩峠は本当にすばらしくて「クラブを続けてよかつた」とつくづく思つた。そして何と言つても楽しかつたのが春のスキー合宿。この時改めて「クラブをしつかり続けていこう」と思つた。

ともかく何とかかんとか2年になるとまず、自分の立場の違いに驚いた。去年は「山に行きたくない」とわがままなことを言つて2年をこまらせた私が、今度は「山に行きなさい」と説得するとは、もつとも去年の2年生のようにうまく説得できませんが)本当に随分変わるものとおかしくなる。それから、山に行つてつくづく感じることは自分の力のなさだ。特に夏山合宿ではそのことをいやというほど感じさせられた。ともかくこれから頑張つて下級生にはずかしくないように、クラブを続けたいと思う。

このクラブに入つて

田辺宏子

私は、この部に2年から入つた。

転校してきて1週間位たつた頃、新入生を勧誘していた友達に「ワングルに入らない？」と話しかけられた。ちょうどどのクラブに入ろうかと迷つていたのだが、前の日に妹が山岳部に入りたいというのに、両親が山は危険が多いからと猛反対しているのを思い出して返事を決めた。

また次の日も誘われたので、両親には何も言わずにトレーニングに出た。トレーニングは、今まで運動等していなかつた私にはきびしかつたが、終つた時のさわやかな気持ちが忘れられなくて、トレーニングをつづけた。

とうとう新入生歓迎会から帰つた時、許してくれ、キャラバンシューズまで買つてくれた。自分の靴をもつたら急にワングル部の部員になつたような気がして、3年まで頑張ろうという意欲が湧いてきた。今まで4回しか山行にいつていないが、なんといつても印

象深いのは夏山合宿だった。

六月の山行の時、初めて重装山行をして、まあ平気だったので今度も軽い気持ちで出発した。

1日めは車中、2日めは、風吹大池まででそんなに印象に残らなかった。

3日め、風吹大池から天狗原まで無我夢中で歩いた。天狗原から乗鞍頂上までは、岩場で気が紛れたのか比較的楽だった。

乗鞍頂上からの下り、雨まじりの強風が顔をつきさす。長時間歩いたせいかわきが思うように動かない。岩から岩へ下る。その度に頭がびんびんびびく。キスリングが肩にくい込んでくる。湖の向こうに半分もやにかかった白馬大池の小屋が見える。歩いているはずなのに少しも小屋が近づいてこない。ふと小屋が遠ざかっていくような錯覚に陥り妙にわびしくなった。到着した時、うれしいというより、やつとついたつかれたという感じだった。2時間40分歩いた。

山というのが本当に美しいと思つたのは六日めだった。

その日は朝から、前日とうつつかわつた上天気。空身で白馬往復となつた。幕営地を出発する皆の顔が輝いていた。傾斜地を登りきると尾根に出た。「あつ虹」とだわわ叫んだ。見下す山々に七色の虹。何とも言えない感動に自然と口もともゆるんだ。この時、ほんとうに山にきた甲斐があつたと思つた。

途中の草花は少なかつたが、きれいだった。ひとつ残念だったのは、白馬頂上で見はらしがきかなかつたこと。前の2日間停滞だったためよけいこの日はすばらしかつた。

来年もさ来年も山に登りたいというきもちでいつばいである。

山　　て

荒木達郎

山の人間というのは下界の人間より人間的な感じがする。実用的で見栄をはらない。他人にお尻を見せてキジを打つというのは山ならではの光景だと思う。また、他人の口をつけた物にまた口を付ける。僕はこういう事を前から夢みていた。外見を気にする必要がないという事は、無駄な時間が相当減ると思う。へたな歌を歌つてもどうという事がないテントの生活は非常にいい。

夏山、わりと楽しかつた。停滞が2日もあつたためだろう。テント生活での人間の塊りは、何となくボワ〜と濃い温かさがあつたようだ。歩行中はつらい時があつた。「あまつ

たれるな。」という先輩の声に、小声で

「ばかやろう。ちきしょう。てやんでえ。」などと口走つたぼくを、今考えるとバカだつたと思う。なぜか？それはその日のテントで先輩もつらい時があるとわかつたからだ。

(それがわかつた次の日も僕はへばつた。)

槍はずばらしかつた。肩からの岩登りつぼいのが非常に軽快だつた。日が照つててあたたかだつた。頂上に立つたとき、気持ちはふわふわして気持ちよかつた。もし僕が自殺したくなつたら春夏秋冬を問わず槍に登つて見ようと思う。どうせ死ぬ気だから死んでもいい。たぶん死なないだろう。

そのあとが良くなかつた。槍沢を下る。最後のピッチ(キジを打つたあとのピッチ)でぐつたりとなり、汗が目に入り涙がでてきた。泣けてきた。早くうちの帰りたいと非常に思い、泣き泣き「早く帰りたい」を連発した。あんな事ははじめてだ。なぜそうなつたか。たぶん黒部五郎のすごい雨でそういう現象が早く来たんだらう。あの時は死にもの狂いだつた。先輩が「気をしつかり持つ。」と言つたのを聞いて非常に心強く感じた。

山をひとりで登るのもいいかもしれない。けど、僕は心を通じ合つてみんなと登りたい。

ワ ン ゲ ル の 中 の 俺

倉 重 篤 郎

俺がワングルに、入つたのは、つまらない衝動によるものである。

俺は、皆より遅れて二学期から、この部に、はいつた。ほとんどクラブ活動をしなかつた一学期間は、俺にとつて、まるで闇だつた。これは、決して誇張ではない。本当なんだ。

そこで、俺は、2学期の充実した生活を志し、どこか、クラブに、入ろうと決めた。

そして、その中で、自分の求める道を捜し出そうとしたんだ。俺は音楽が好きであるから、ブラバン靴入るのかなと思ひ、長屋をうろついてたわけだ。そして、ふと、足を止めた所に、ワングルと書いてあり、ふらふらと中に、入り、いつの間にか部員になつていた。俺は、「やり抜くぞ。」と、心に誓ひ、今日までのトレーニングに励んできた。先輩も同学年の部員も本当にいい人達で、俺は鍛えられてとても、うれしかつた。しかし、今、俺はとても悩んでいる。登山というものが、實際上、自分を發揮できる道であるのか。先輩、若しくは、一年のメンバーの中には、心から登山を、楽しんでいる人も、多いようだ。

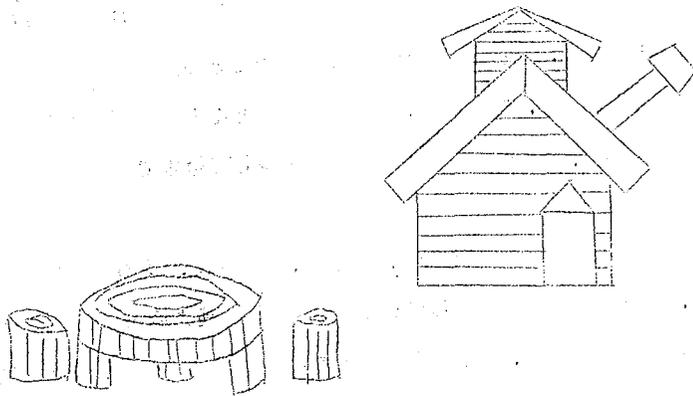
しかし、本式な登山をまだ一度も経験した事のない俺にとつては、それが恐ろしくさえ

思える。もちろん、少なからずの期待も抱いているのだが………。

登山というのは、非常な精神力と、体力とが、要るものだ。そして、それらを持ち、苦難を克服して、自分の限界を延ばす所に登山の尊さがあると思う。俺はこのように登山というものを賞賛を付加してまでも肯定するのだが、自分自身の問題になると、先ほど述べたように、やはり、不安定である。

はやく、この不安定から脱したい気持ちである。

くだらぬ事ばかり書いたが、これが現在の僕の偽らない心境である。



◎ 特 別 寄 稿

ワンゲル部員に期待する

小川建吾(12期)

我々は高くそびえる山を見るとき、その美しさに引かれその頂に立ちたいという欲望にかられる。重い荷を背に登り始める。汗もかくであろう。つまづくかもしれない。荷に耐えかねて苦しむかもしれない。でもこの"登る"という苦しみの行為を通じて、私達は山を、自分達の向かう対象として初めて捉えることが出来るのである。雨が降る、風が吹く、水が流れるといった様々の山の変化を、登山を行う者の立場から観察し直そうとするのである。地質学者や気象学者が研究対象にするのと異なり山を含む自然の動きを山に登る我々にふりかかるものとして捉えるのである。単なる知識としてではなく、気温が下れば体温を失い疲労するとか霧がかかれば前進しにくくなるという具合に、もつと生々と自覚するのである。

しかし、平地と異り山における自然条件の変化に対する不適切な対応が容易に人間の死に結びつく。この宿命故に今まで登山家は必死になつて自然を観察し自然と対決し、その歴史を作ってきたのである。その歴史の結果は登山に関する様々なルールの確立、登攀用具の製作改良、登山ルートの開拓等に見ることが出来る。しかし今新たに山に興味を抱き始めた人々は、これらの歴史の一断面を山登りを始める大前提として受け入れる誤ちをししばし行いのである。奥穂高岳といえば、即上高地までバスで行き濁沢を通つて登る山と考へたり冬の八ヶ岳は黒百合平と赤岳鉱泉と行者小屋が定着のベースとしてあるといった常識を誰しも持っている。しかし、これらは人間が今まで獲得した成果として評価し得ると同時に、獲得したが故にもつ矛盾を内含しているはずである。これらを獲得した登山家自身はその矛盾を十分に自覚していたかもしれないが、その結果のみを知る我々は...ともしれば無批判に受け入れてしまうのである。それらを我々にとつての獲得物にするには、我々が行う登山に伴う行為一つ一つに自覚的にならなければならない。今歩いている道、今手にしているピッケルが、何故、どの様にして出来たのかを自分の頭で考え直すことよりはじめて我々は自然と対決する登山家になれるのである。

現代における「文明の進歩」は山の奥まで通じる道を、交通機関をつくり出した。人々は天神平から谷川岳を、八方尾根から後立山を登山することなく見れる様になつた。そこだけでなく山のあらゆるところで私達は"登山"を意識することなく登山を行なえる様に

なつた。道のついた山を山それ自体と、人為的自然を自然そのものと思ひ込み易い情況がいたるところで作られようとしている。それらに盲目的に寄りかかることは山を見誤ると同時に山に登る我々自身を、あいまいな主体性のないものにしてしまうのである。さほど深刻に「登ろう」という意志をみずから確認しないでも頂に立つてしまう場合が多いからである。

この様な危険性はチーム登山にとつても同じである。山を目指すチームがチームとして成り立つには、チームを構成する各個人の登山に対する厳しい意識性が要求されるのである。我々の必要とするチームは、山へのあこがれを持つた人々の単なる集りでなく、あこがれに登山という行為をすることにより実現しようとする意欲的な生々とした人間の集りなのである。そこでは山それ自体を詳しく知ると同時に、行為に伴う様々な喜びや苦しみをも問題にし合える場がつけられねばならない。各個人の行動能力と同じ様に、いやむしろそれ以上に、行動に対する意識性、主体性をお互に要求し合える場がチームなのである。山の美しさにただ感激し合っているだけでは結びつきは出来ない。自分の中に他人の中に「登山」に対する厳しい努力を認めるとき初めて共通の目標をめざす仲間としての信頼関係が出来るのである。山に対するあこがれを追求すればする程我々は、我々が登る山と同時に、登る我々自身をみつめざるを得ないのである。個々の山行のなかでチームの一人一人は各自の山に対する認識が、相互の人間的なつながりが、どれだけ強まつたかを真剣に考えなければならない。

最近における山に関する諸情報の豊富さは、ともすれば我々に山の頂のみに目をむけることを強要する。しかし重要なのは我々がいかなる登山をしようとしているかである。一つの山の頂に至るルートを選択する際に、既製のルートのうちどれをとるかでなく、可能などの様に登り方があるかを考えるところから登山は始まるのである。先達の足跡が余りに立派に残されているために、彼らの努力を、自然に立ち向う人間の行為を、余りに粗末にしていることはないだろうか。西高ワングル部にも山岳部時代から勝得られた数多くの歴史の産物がある。それらはそれぞれの時代に山と自己とに対する厳しい問いかけのなかで創られた歴史なのである。新たにそのあとに続こうとする諸君はそれ以上の問いかけを要求されているし、問いかけなくしては歴史の成果は、腐つた危険な踏み台ともなつてしまうのである。山に対する情熱と同時に、チームをより強くしようという情熱と冷静さを部員全員が獲得してくれること望む。

どうしよう

岩井 祥子(20期)

「おおきい!」「大きいなあ」黒く雄然と構えた南アルプスの山々を目前にして我々はこの言葉を繰り返した。この夏行つたO.G合宿の南ア縦走中のことである。馬鹿尾根から見た北岳、間ノ岳の印象は特に鮮烈。これから先の行程をその稜線上にたどつたとき、行程の長さには驚く。一つ一つの山がとにかく大きい。森林限界を越え、ダケカンバの木の向こうに山の姿が見える度に私は声を上げる「すごーい。……どうしよう。」体の中から突き上げてくるこの感動の処理に困つて「どうしよう」なのである。四人はただ山に入らる。ガスがかかつたり切れたり。変化も激しい。ガスが晴れるのを待ちながらフト高一のときの夏合宿を思い浮かべる。母池から白馬、雪倉そして蓮華温泉への行程だつた。初めて登つた三千メートル級の山。私は雪溪、お花畠に目を奪われ、青くさえた月に感動した。しかし不思議と山そのものに対する印象は薄い。合宿は楽しかつた。明け方の寒さに目を覚まし、おもわず体を縮めたものだつた。しかし隣で同じように体を縮めた仲間がいると感じるのは愉快なものだ。そんな生活を提供する場が山だつた。都会とは離れた生活、日常見慣れているものと大きく違つていた月、花、それ故に印象が強いのであらう。新歓以来、いきなり北アルプスに行つた私には、山自体を理解することはできなかつた。今、南アの山を見て大きいと感じるのは、今までに奥多摩等の小さい山を多く登つてきたからであらう。自分の中に比較すべきものができていたからである。切れたガスの間から再び見える山を前にして「大きいなあ」と言つて見る。そして、そんなこと言える自分がおかしくなる。「大きいなあ……どうしよう。」

高校生のリーダーについて

田中 将利(4期)

私が西高山岳部のリーダーに選出された時代を振り返つて見ると既に20年に近い歳月が流れている。短い様でもあり長い様でもある。私が入部し在学した時代——それは敗戦後間もない昭和21年から、朝戦動乱によつて日本経済が立直つて来る昭和27年までの六年間——は云はば、戦前の登山界の中核旧制高校、旧制大学が持つていた実力を新制高校、大学がいかにして退付こうとしているかと云う頃でもあつた。又西高に於いては、ハ

イキング形式からスポーツアルピニズムに脱皮せんとする胎動期にあつた。

登山する人口も少く、登山路、ガイドブック等があまりあてにならない頃である。登山靴すら容易に手に入らぬ頃、自らの手で兵隊靴を改良していた頃であつた。だから今の高校生が、入部時全個人装備がととのい、すぐに北アルプスに容易に入山することを大変うらやましく感ずることがある。

登山とは一体何か……それはさて置き、登山とは一人でも出来るスポーツである。文部省がどうの、学校当局がどうの、と云はずに山に登りたくなつたら1人で登つてはならないと云う規則はない。又ルールがないスポーツと云えば登山だけと云えようか。

しかし考えても見よう。私達のすむ都会生活を。暑ければクーラーがある。寒ければ、暖房も入る。歩きたくなければ車がある。腹が空けば電話一本で出前が来る。眠くなれば暖いフトンが待つている。不満があればゲバルトしても死刑にはならない。

現今の山ではどうだろうか。装備はすぐ手に入る。よほどのボサ山でない限り冬山でも先行パーティのラッセルがある。岩登りガイドブックは、ホールド、スタンスまでこまやかに教えてくれる。良い山は皆、小屋ケ岳の観を呈している。楽しき哉登山。

山とは平坦地より高いから山と云う。高いと云うことは寒いと云うこと。高いと云うことは、傾斜があること。傾斜があると云うことは、水が流れること。雪が降れば崩れると云うこと。水は又浸蝕すると云うこと等々。……

山登りが楽しく又容易になつた反面、この様な子供でも判る様なことを頭から抜きさつてしまつた山登りを人々はしていないだろうか。

山登りは一人でも出来る。しかし複数人でも可能である。1人と複数人とは複数人が強いと思つている人も居る様である。では何故にパーティを組むのか。何故にリーダーを必要とするのか。リーダーの権限とは一体何か。十八才未満の高校生にリーダーが務り得るのか。実業山岳会と高校山岳部の目的は同じか。

今西高山岳部の中で、ごく当り前のこととして行はれている数々の不文律、惑いは行動形態の多くは、ハイキング式山行形態からの脱皮時代に、その1つ1つについて今では考えられもしない抵抗の中で、それこそ真剣に創り上げて来たものである。それらがすべて現今の部に必要かどうかは又別問題である。たゞ私の云いたい事は、スポーツアルピニズムとは、自らの限界を正知正覚すると共に、確実にフロンティア・ラインを押し進めることにあると思う。その自らとは、一つに個人の中に存在し、一つにチームとして存在することである。その限界の認識には1寸の甘さを否定する厳しさが必要だと思ふ。1つの事

象を無意識に過す、恐いは単にその底にあるものを忘れ形式化することは、厳にいましめる
の必要がありはしないか。山登りに於ける判断のファクターは、非常に複雑に入りなすの
であるから定形化したり、公式化することは禁物である。それらを早く正しく判断するに
は、かなりの経験を必要とすることは勿論である。

私も17, 8才の頃から22, 3才の頃は、かなりの自信もあつたし又、大人であると
云う意識を持つていたことは確かである。

しかし20年の歳月を通して見て、それはとんでもない誤りであつて山登りとは、もつと奥が
深く、リーダーの判断とは恐い事だなどつくづく思う様になつた。過ぎし山登りの1頁
1頁にリーダーとしての孤独感を思い出すと同時にゾツと背筋に冷いものが走ることがあ
る。

よく高校生の部長だのリーダーだのと云うことを聞く。他のスポーツはいざ知らず山登
りにあつては、無限に近い自然、人為環境を2, 3年の有限経験によつて、よしとし、高
校生部長、リーダー等のはねあがり者が出現するとすれば、無責任ものと云つても差支え
なからう。

高校登山界を減すことは、絶対にさげねばならない。が少くとも高校山岳部に必要な指
導層の強化は、単に西高のみにとどまらず、日本の登山界にとつてエベレストよりも急務
ではないのか。



V 部 員 名 簿

◎顧問教官

| | | |
|------|------------------------|---------------|
| 増田良繁 | 練馬区北大泉63-1-9 | (924)0849 |
| 中村道雄 | 渋谷区溝谷町29うぐいす住宅5-203 | (461)2846 |
| 猿渡秀達 | 武蔵野市境1-24-19 | (0422-51)3560 |
| 草川秀雄 | 三鷹市上連雀6-15-29 | (0422-44)2426 |
| 田村耕一 | 小平市喜平町860-1小平団地3-2-506 | (0423-21)8478 |
| 間野典彦 | 板橋区小豆沢2-31-2-211 | (969)7850 |

◎3年部員

| | | |
|------|------------------|---------------|
| 在間直樹 | 三鷹市牟礼三鷹台団地25-405 | (0422-45)8511 |
| 田口真啓 | 練馬区旭丘1-33 | (953)1254 |
| 永井浩之 | 杉並区本天沼3-41-2 | (399)3318 |
| 依田桂子 | 川崎市生田6659-49 | (041-96)2561 |
| 吉沢美波 | 杉並区天沼2-9-4 | (391)1107 |

◎2年部員

| | | |
|------|---------------|-----------|
| 荒木仁夫 | 練馬区田柄2-14-12 | (930)5206 |
| 鈴木幸弘 | 練馬区豊多摩北4-5 | (991)2577 |
| 西井和彦 | 杉並区善福寺2-1-2 | (399)4129 |
| 吉田真也 | 町田市成瀬3377-59 | |
| 甲斐洋子 | 中野区東中野4-7-21 | (371)3016 |
| 嶋田桂子 | 中野区新井2-30-7 | (386)2552 |
| 田辺宏子 | 世田谷区代田2-13-17 | (411)3275 |
| 東郷頼子 | 中野区上高田5-25-7 | (386)7538 |

◎1年部員

| | | |
|------|-------------|-----------|
| 荒木達郎 | 中野区中央3-17-7 | (371)8146 |
|------|-------------|-----------|

| | | |
|--------|---------------|-----------|
| 石川 泰 毅 | 杉並区高円寺北4-8-7 | (337)7335 |
| 今井 学 | 中野区中央1-39-15 | (369)4076 |
| 倉重 篤 郎 | 杉並区高井戸東3-6-9 | (334)2825 |
| 松田 重 明 | 練馬区上石神井1-39-2 | (920)5413 |
| 風巻 恵美子 | 中野区瀬生町2-16-12 | (372)3783 |
| 広兼 洋 子 | 中野区丸山2-9-2 | (330)1005 |
| 渡辺 容 子 | 杉並区久我山3-10-36 | (334)3824 |

西 朋 登 高 会 会 員 名 簿

◎特別会員

| | | |
|---------|-------------------------|-----------|
| 都 筑 修 一 | 長野県松本市女鳥羽町463 | |
| 鳥 山 榛 名 | 目黒区上目黒5-2425 | |
| 中 村 淳 | 世田谷区代沢2-25-20 | (411)1974 |
| 岩 井 富士雄 | 台東区浅草桂町3-2 | (851)1908 |
| 布 施 千恵子 | 千葉市稲毛町2-4 | |
| 篠 崎 武 | 西多摩郡日の出村大久野1713(五日市)297 | |
| 石 井 学 | 杉並区善福寺3-10-19 | (390)3937 |

◎普通会員

| | | |
|----------|---------------------------|--------------|
| 安 藤 英 彌1 | 三鷹市深大寺3829 富士見住宅212 | |
| 林 春 彦2 | 江戸川区北小岩5-28-3 | (657)7555 |
| 南 波 貞 敏2 | 国分寺市南町2-10-22 | |
| 長 崎 正 躬4 | 鎌倉市山崎1033 | (0467-6)2851 |
| 田 中 将 利4 | 杉並区西荻北2-11-13 西荻窪マンション405 | (396)6410 |
| 田 中 実4 | 杉並区阿佐谷南1-3-18 | (311)6389 |
| 平 沢 勇4 | 杉並区天沼2-1-2 | (391)3613 |
| 笹 田 英 次4 | 中野区仲町13 | (363)7631 |
| 鈴 木 輝 夫4 | | |
| 山 口 雄 弘4 | 武蔵野市吉祥寺本町2-14-27 | |

| | | | |
|-------|-----|------------------------------------|----------------|
| 佐藤信治 | 4 | 八王子市本郷町20 | (0426-2)1136 |
| 松田朝夫 | 4 | 大阪府豊中市本町9-59花蝶団地21 豊中 | (53)-2710(呼) |
| 町田明 | 4 | 杉並区下井草4-20-20 | (390)3217 |
| 見里朝規 | 4 | 兵庫県龍野市龍野町日飼225-4 | |
| 渡辺享 | 4 | 杉並区天沼3-7-36(旧) | |
| 目沢民雄 | 4 | 杉並区荻窪1-108 | (393)0743 |
| 成瀬泰雄 | 5 | 文京区西片2-8-7 | |
| 加藤鈴夫 | 5 | 杉並区永福町47 | |
| 鈴木潤 | 5 | 杉並区下高井戸4-947 | (312)2791(留守宅) |
| 岩崎元子 | 6 | 杉並区大宮前2-712 | (333)9751 |
| 桑田敏子 | 6 | 横浜市戸塚区二ツ橋町475 | (045-36)5336 |
| 稲田弘美 | 6 | 埼玉県朝霞市膝折433 | (0484-62)2605 |
| 飯塚康史 | 6 | 立川市砂川町34-2けやき台団地29-304(0425-2)0866 | |
| 岩波康之 | 6 | 葛飾区小谷野町303 | |
| 米野弘躬 | 6 | 立川市泉町6-180 泉住宅20-503 | (0425-25)8643 |
| 小田尚於 | 6 | 横浜市戸塚区笠間町1324 | |
| | | 大船マンション411 | (0467-6)4385 |
| 林武志 | 6 | 武蔵野市吉祥寺東町1-11-7 | (0422-22)5475 |
| 川口和雄 | 6 | 川崎市百合ヶ丘1-9-7 | (044-96)0162 |
| 松田稔 | 9 | 杉並区西高井戸1-96 | (333)1658 |
| 黒沢隆 | 10 | 藤沢市大鋸藤沢団地38-1202 | |
| 橋本鋼太郎 | 1.1 | 練馬区立野町909 | (920)4434 |
| 今井義治 | 1.1 | 世田谷区豪徳寺1-42-4 | (427)0905 |
| 田中康弘 | 1.1 | 中野区大和町3-32-1 | (385)1227 |
| 沢野徹 | 1.1 | 中野区宮園通5-7 | (381)0636 |
| 関谷興雄 | 1.1 | 武蔵野市境南町1-12-15 | (0422-44)7774 |
| 小川建吾 | 1.2 | 杉並区上高井戸3-857 | (334)0013 |
| 梶内俊夫 | 1.2 | 中野区上鷺宮1-9-17 | (990)7658 |
| 川田秀明 | 1.2 | 杉並区大宮前6-357 | (333)3374 |
| 橋本章 | 1.2 | 平塚市中里80-2 日本ノック平塚寮 | (0463-22)1410 |

| | | | | | |
|-----|-----|----|-----------------|---------|---------------|
| 野原 | 光 | 13 | 川崎市宮崎字新鷺沼 | 1540 | |
| 板垣 | 乙未生 | 14 | 杉並区井荻 | 2-60 | (390)6394 |
| 山本省 | 治 | 14 | 杉並区高円寺南 | 4-46-1 | (312)2439 |
| 小津 | 亮介 | 14 | 船橋市大穴町 | 665 | |
| 平木 | 桂太 | 15 | 杉並区荻窪 | 2-96 | (332)2897(在申) |
| 上遠野 | 清 | 17 | 杉並区今川 | 2-4-16 | (399)4097 |
| 三浦 | 等 | 17 | 中野区新井 | 1-28-4 | (386)2054 |
| 梅原 | 伸二 | 17 | 杉並区西荻北 | 2-4-12 | (390)0363 |
| 宮武 | 義照 | 18 | | | |
| 尾崎 | 純理 | 18 | 練馬区練馬 | 3-17-1 | (991)4279 |
| 滝口 | 道生 | 18 | 目黒区自由丘 | 3-2-2 | (718)1576 |
| 三浦 | 潤 | 18 | 杉並区高円寺北 | 1-10-22 | (386)0833 |
| 山野 | 裕 | 19 | 世田谷区祖師谷 | 2-136 | (483)2761 |
| 岡田 | 徹 | 19 | 杉並区本天沼 | 3-26-5 | (396)0912 |
| 永井 | 祥一 | 20 | 杉並区本天沼 | 3-41-2 | (399)3318 |
| 伊東 | 伸作 | 21 | 北多摩郡久留米町ひばりヶ丘団地 | 168-265 | (0424-64)6515 |

×

×

×

| | | | | | |
|-----|----|----|-----------|------------|---------------|
| 佐久間 | 令子 | 19 | 練馬区東大泉 | 1124 | (925)6769 |
| 高木 | 彰子 | 19 | 武蔵野市吉祥寺本町 | 4-24-9 | (0422-22)6688 |
| 岩井 | 祥子 | 20 | 立川市富士見 | 6-6-27-402 | (0425-25)7345 |
| 中井 | 早苗 | 20 | 杉並区下高井戸 | 1-64 | (321)7115 |
| 羽柴 | 春実 | 20 | 杉並区和泉町 | 268 | (328)6017 |
| 藤田 | 明子 | 21 | 三鷹市井之頭 | 2-11-22 | (0422-43)1320 |
| 山田 | 優子 | 21 | 武蔵野市西久保 | 1-37-4 | (0422-51)2260 |

編 集 後 記

○やつと「彷徨」20号ができました。1年半の記録をまとめたので、けつこうぶ厚くなりました。それにしても、人からは聞いていたものの、編集とは大変な仕事。毎晩、深夜放送を聴きつつ奮戦し、飲んだコーヒーが4989杯(シツクハツク)。

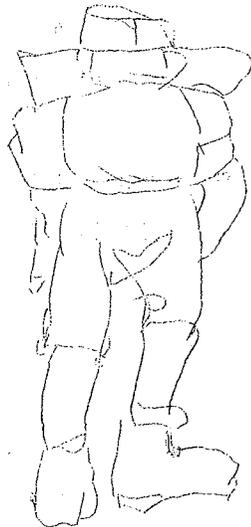
☆ ☆ ☆

○クラブ存続問題は我々にとって生きるか死ぬかの問題と言つてもいいほど重大な意味がありました。本号はその「総括」を試みたのですが、内容の荒つぽさには我れながら当然御叱咤を受けるものと覚悟しています。ただ、これを契機にクラブ関係者がクラブのあり方について再検討してくれることを期待しています。

☆ ☆ ☆

○8月11日 西朋の福田善明氏は会社山岳部での山行で豪雨で増水した黒部川奥黒部ヒュッテ付近にて同行者1名とともに行方不明となりました。その後、けんめいな搜索活動をしたにもかかわらず何も発見することができなかつたとのこと。我々は心から哀悼の意を表するとともに、今後2度と遭難を起こすことのないように我々なりに、さらに真剣に考えていかねばならないと思います。

(2)



彷徨 第20号

1969年10月30日発行

発行所 都立西高等学校ワンダーフォーゲル部

東京都杉並区大宮前3-118

TEL (333)7771

編集責任者 在 間 直 樹

印刷所 東京大学出版会教材部